
月光のオルゴール

宵城空歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光のオルゴール

【Nコード】

N1813N

【作者名】

宵城空歌

【あらすじ】

すべてを失った少女は崩壊を望んだ。これは、少女とその少女を取り巻くどこか壊れた人たちの物語。

すべてを失った少女（前書き）

特に重くも暗くもはないです。過去にぐちゃぐちゃあっただけです。基本的に壊れた人しか出てきません。まともに見えてもまともじゃないです。たまに残酷描写を含みます。ご注意ください。

すべてを失った少女

「かわいそうに……。」

「両親が急に死ぬなんて……。」

少女は知っている。その憐みの目の向こう側を……。

「親が急に死んで何も言えないのよ……こんな子には辛すぎる運命なのよ……。」

少女は知っている。同情の裏にあるものを……彼らの底にある冷笑を。美しい銀髪は数日前に火事で亡くなった母のよう。そして、鋭利に輝いた冷たい黒い瞳は母とともに亡くなった父のよう。その瞳から流れる涙は全くない。まるで、瞳が乾いてるように。

少女はその神のように美しすぎる容姿と人間離れた知能、身体能力よりたくさんの人々から恐れられていた。裏で罵られてきた。ずっと孤独だった。十歳にして両親をいっぺんに失った孤独な姫……傷ついていた魂、精神……少女のすべては唯一の理解者たる両親を亡くしたことを境に……壊れた。憐れみの目、同情の目……すべて冷笑に変わる。『ザマアミロ』という言葉で少女の世界は汚染される。

少女は狂った。孤独の姫は世界を憎み、世界の崩壊を願った。いや……自分で壊してやりたいと強く思った。力を……それだけを求めた。誰もいないところへ行きたくなくなった。そこで、葬儀場の裏へ向かった。そこで自分だけの音を奏でるためにフルートを吹いた
刹那。

「力が欲しいか？」

頭上から声が降ってきた。少女はそこに人がいたことに驚きながらもうなずいた。

「どれだけの犠牲が……代償があっても？」

少女はためらわずにまたうなずく。

「お前が契約するのは悪魔だ。地獄から這い上がって来たな。それでも？契約を結ぶか？」

「私だって、地獄の住人だもの。そこから必死で這い上がってきた
ヒトだもの。」

「なら与えよう。すべてを……。」

少女の運命は変わった……。

すべてを失った少女（後書き）

こちらでもワードの分を改稿した作品です。かなり書きためてあります。更新頻度はそれなりに早い……はず。読んでいただければ幸いです。活動報告で登場人物紹介など書いていくつもりです。ファンタジーなので用語がね。ちよつと大変かもしれない……こんな物語ですがよろしくお願いいたします。

平穩だった日（前書き）

ちよっと長め？

平穩だった日

「だからね……世の中ってというのは残酷で、理不尽だと思うんだ。」
十月半ば、二学期の行事がスキー実習以外すべて終わり、中間テストも終わった日の朝八時、私立ジェイン学園の中学棟屋上で、私
ルーチエ「ノクフォルトのとなりにいる友人で元人間、現吸
血鬼であるリイン」ファインスが泣きそうに言った。

「はいはい。よくまあ毎日飽きずと同じことを言ってもらえるわね。
諦めなさい。どうせ容姿のことでしょう？そうそう変えられるもので
もなし。」

これは、その隣にいる友人、神社の娘であるミリエナ「フェイン」。
「うう……だつてえ……一つ下の女の子が自分より大人っぽかった
ら……辛いよ！」

リインのもつぱらの悩みは童顔だった。髪と瞳は栗色だ。そつちに
不服はないらしい。

「そんな経験ないわね。」

ま、ミリエナは年相応……というかそれより大人っぽいしな……髪や
瞳も藍色がかつた黒だしね。別にこれといって文句はないのだろう。
「まあ、世の中が理不尽だつて言うのには私も賛成だけどね。とい
うか事実でしょ。」

「それは私も同じ意見ね。残酷っていうのは……言いすぎな気もす
るけど。」

そうかな……私は世の中は残酷だつて思うけどな……。

「はあ……DNA恨む……。」
リインのお母さんも童顔だったなそついや。もう数年会ってないけ
ど大人は成長しないからあの顔のままだろう。ということにはリイン
の思いむなく彼女もずつと童顔のままだろう。かわいそつに。ま
あ本人もそのことに気付いているから嘆いているわけだが。

「あーあ……ルーチエもミリエナもいいよね……うん。」

「仕方ないでしょ。ていうか、私はあまり好きじゃないよ。この容姿。お母さんに似すぎてるから。」

私の容姿は瞳の色を除いて母親そっくりだ。泣きたいくらいに。

「うっ……でもな……やっぱりな……。」

なんというか……もうちょつと悩むことはないのかね？まあ、筆記に關しては毎回一位で、実技に關しても上の中ぐらい取ってるわけだし。成績に關しては悩むことがないのだろう。

「今日も平和だわねえ……。」

確かに。できればこう……ずっと平和でいてほしい。それはそれでつまらない気もするが。そう穏やかな気持ちで空を見上げる。ああ……今日は秋晴れというか……突き抜けるような青い空だ……それでいて結構暖かいし……と思っていると……確実に私たちを狙って黒いかまいたちが襲ってきた。平和だったのに……。

「はあ……。」

「じゃ、ルーチェ。よろしく。」

しかも二人は速攻でお任せコース取ってるし。まあ、気持ちはわかるけどさ……あー……こりゃ避けられないな。仕方がない。足で弾くか。ということとそれを実行する。

『キーン！』

普通ならこれ、足の骨が砕けてるはずだ。

「さすがね……力だけを求めた姫は強いわね……。」

「だよな……。」

完全に傍観者だよ……結界張って安全確保してるし……私ひとりに押し付けてやがる……。

「あ……なんかいつぱい来たよ……ルーチェ……頑張つてね……。」

ム力つく……かまいたちを使って襲ってきた相手よりも……友人がム力つく！

「ったく……吸収。」

はい。かまいたちは私の手の中に入っていきます。素晴らしいですね。

「吸収、吸収、吸収！」

すべて手に入っていきます。最高の防御ですね。

「はい。返却。」

倍にしておそらく相手がいると思われる木の上に返す。木が折れる
メキメキバキツという音がするが気にしない。ドサツという音がす
る。どうやらヒットしたようだ。さすが私！

「じゃ、ここに来てもらおうか。移動。」

相手がやってきた。正確に言うと落ちてきた。まあいつか。

「……痛い……」

平穩だった日（後書き）

ルーチエはオープニングの少女です。両親の死んじやったあの子。キャラが変わってる？いえいえ、後々色々分かってきますよ。なんだか普通そうな人たち。でもみんな、どこか壊れているんです……。

貴族だった奴隷

ソレは、黒い髪に黒い瞳、中性的な顔立ちの少年だった。年は私たちより一年二年下ぐらいだろう。ということは中一か小六のどっちかだろう。なのになぜか、制服の校章の校名が書いてある部分の色が私たちと同じ青だ……もしかして同い年？

「うう……ひどいじゃないですか！」

「あなた、名前は？」

あえて少年の言葉は無視する。

「失礼な！そちらから名乗ってくださいよ！」

私に口答えするとは……度胸のある少年だ。私はニツコリと笑いながら続ける。

「早く答えないと……売り飛ばしちゃうわよ？」

「は？」

「奴隷として。」

「う……そ、それは困ります。わかりましたよ……名乗ればいいんでしょう？名乗れば。シエーンランルス＝プライリエンスウェイですよ。シエールで結構です。長いですから。」

確かに……というか名付け親ただけ性格悪いんだよ……

「で？あなた方は？」

「中等部二年A組、ルーチエ＝ノクフォルト。」

「同じく中等部二年A組、ミリエナ＝フェインよ。よろしくね。シエール。」

「同じく……っってもう言わなくていいよね？リイン＝ファインス。言っとくけど三人とも同学年だからね！」

よっぽど年下扱いされたくないんだな……気持ちはわかるけどさ……。

「えーと……ルーチエさんと、ミリエナさんと、リインさんですね？」

「誰も名前で呼んでいいなんて言っていないわよ。」

「すみません。えーと、ノクフォルトさんと……」

「冗談だけど。」

「からかいがある子だ……どこぞの飼い主とは大違いだ……」

「ひどい……僕今ものすごく傷ついたので……」

「冗談言つてたら売るよ？」

「すみません！嘘です！売らないで！」

「うわぁ……ヤバイ。超いい子だ……なんというか……純真無垢というか……」

「大丈夫よ？私の飼い主」

もとい主なんかよりずうっといい

とこに売つてあげるから……」

私の主が悪魔も真つ青な極悪人なのだが、まあそれは置いて……

「……あなた奴隷なんですか？いや、絶対嘘ですよね。あなたみたいな天使も嘆くような性格してる人が奴隷だなんて。そもそも絶対手なずけるの無理でしょ。」

残念なことにいるのだ。私みたいな子を奴隷として使うような奴が。

「事実だよ？ね。ルーチエ。」

「うん。」

「なんていうか……悲しいわよね。いや、あの人この世界にいちやだめだと思っただけど。」

私だつてそう思う。しかも自分で悪人だつて認めてるから余計にたちが悪い。

「私じゃなかったら音をあげてるよ……というか、その前に死んでるつて……」

「うん。ルーチエが生きてるのつて奇跡だと思うよ？」

「なんせ、言うこと聞かない人には何してもいいつて教育する人だもん……まあ尊敬するに値する人だけどさ……能力に関しては。」

何もかも私を超越してる人だ。尊敬はできる。それだけの価値がある。

貴族だった奴隷（後書き）

ルーチエのご主人さま「オープニングの男の人。奴隷といっても特に何もしてません。命令に従うだけ。後は自由な生活です。学費も出してもらってます。」

黒魔楽師だった少年（前書き）

大事なことを書き忘れていました。お気に入り小説登録ありがとうございます！
ごぞいます！これからもがんばりますのでよろしくお願いします！>

「――」<

黒魔楽師だった少年

「何となくルーチエさんの人格はその人のせいで歪んだんじゃないかと思うんですが。」

「いや……もともと結構歪んでたわよ？まあ、悪化したのは事実だけだ。」

「いいように進んでるのか悪いように進んでるのか……微妙なところだよ……。」

散々だ。私、そんなに悪い人じゃないっての。

「ところでさ……シエールって黒魔楽師？」

さて、ここで魔楽の説明だ。魔楽とは

楽器に召喚したいものの色をした六角形の宝石

触媒

をはめ込み、音楽を演奏することでものを召喚する術のこと。黒魔楽とは、黒の触媒を使う魔楽のこと。基本的に嫌われる魔楽だ。人の負の感情に侵入し、操るからだそう。まあ、黒魔楽だって使いようによっては人助けになるのだけ。ちなみに白魔楽というものも存在する。こちらは、神社が代表的だ。浄化を専門とする。また、黒魔楽と違って、ごくごく一部のしかできない。神社の中でも神の加護を受け、神に愛される人しかできない。そして、ミリエナは白魔楽師だったりする。冗談抜きですごい。

「う……ばれちゃいました？」

「当たり前でしょ。黒いかまいたちなんて……そもそも何で私たちがなんかを襲ったのよ？」

そりゃあ、私だって、結構な数の人間から恨みを買っているが、何もこんな少年に襲われるいわれはない。見たところ暗殺者ってわけでもなさそうだ。

「う……いつもの日課なんです。黒魔楽の調子を見るんですよ。屋上なら誰もいないと思って……。」

なるほど。魔楽の調子ね……確かに納得できる。

「木の上にいたのは？」

「学園には内緒なんです。ばれたら怒られると思って……下手したら退学になりかねませんし……。」

「連発したのは？」

「最初の時点で十個って決めてたものですから……本当にすみません。あの……怒ってます？」

「あたりまえでしょ。いきなり襲われて怒らないわけじゃない。それも人が、穏やかな気分になってた時に。」

不幸な偶然が重なったってことだ。シエルからしたら最悪だろう。屋上には人がいないと思つて、十個のかまいたちを用意し放つた。屋上に穏やかな気持ちになつている人がいた。機嫌を損ねた。そして、桁外れに強かつた。本当に最悪な偶然だ。私が穏やかな気持ちだったのも、強かつたのも、そして屋上にいたことさえも偶然なのだから。

「まあでも許してあげるわ。このままだとかわいそうだし。黒魔楽のことも黙つておいてあげる。私たちも学園に秘密にしていることとかあるしね。」

「ありがとうございます！僕も、今日から二年A組の生徒なんです！よろしく願います！」

やっぱり同い年かよ………なんというか、それにしちゃ若い顔立ちだな……。

「特例として入れたんです。言ってみれば飛び級ですね。僕の黒魔楽のお師匠様が手を打つてくださったんです。」

なるほど。シエルにはお師匠様がいるのか……。

「両親は早くに僕を捨ててしまったので……捨つてくださったのがお師匠様です。」

何とも言いづらいな。本人あつけらかんとしてるけど。それ、結構ディープだぞ。シエル。

「ふーん……。」

ほらみる。ミリエナもリインもなんとも言えないって顔してるじゃ

ないか。

黒魔楽師だった少年（後書き）

魔楽についてとやかく書かれています。特にこの物語に絡んできません。じゃあなんで書いたんだよとか言わないであげてください。どっちかっていうと魔法とか剣とかそっちがメインな気がする。あはは……すみません。ごめんなさい。反省しつつも直しません。だって黒魔術白魔術じゃ後々困ったことになるんだもん。

孤独だった姫君（前書き）

長め？

孤独だった姫君

「あ、大丈夫ですよ？あまり両親のこととか覚えてないので。シヨックはあまりなかったんです。」

そういう問題だろうか……私だって両親から捨てられたようなものだけど、シヨックは受けた。捨てられて、こんなに純粋な眼をしていられるだろうか……私には無理だ。そもそも人間としておかしいヒトなんてものは、明らかに矛盾している生物であり、モノを愛することも出来ればそのぶん憎悪することだってできるのだ。その最終形態が、世界全てを憎むということ、私だったりする。やっぱりこの子は異常だ。私の苦手な分野の子だ。ヒトはモノを憎まずにはいられないはずなのに……私だって異常だろう。でも、彼の場合は……なんとというか……やっぱりヒトじゃない。ヒトはそんなに清いものじゃない……そう思っていないと私は生きていけない。もしもヒトが清いものであるならば、それを壊そうとすることや壊したことの罪悪感で押しつぶされてしまうから。

「孤独の姫らしいよな……この考えも。うん。」

「なんか言いました？」

「いや、シエール殴りたいなって。そんだけ。」

「ルーチェ……露骨すぎるよ。」

だろうね。でも、事実だ。というか壊したい……違う……そうじゃない。壊さなくちゃならない気がする。

「とりあえず、身の危険を感じますよ……。」

「とりあえず、黒魔楽師には向いてないよね。シエールはさ。聖者にでもなるべきだと思うよ？」

「は？」

黒魔楽師っていうのは世界の表も裏も知ってなければならぬ職業だ。彼には向いてない。全く。世界は彼の思うほど素晴らしいものでもないし、人間はこの世で一番きれいな存在でもない。言ってみ

れば世界という大きい鍋の中の具にすぎない。ただその世界で威張ってるだけの存在だ。まあ別に私には関係ないことだけど。だって私は悪魔だから。人間とはまた少し違っているから。

「えーと……ルーチェさん？」

「やっぱ、調教が必要だよな。うん。まあ、おいおいわかってくるんだらうけどさ。」

私がどれほどひどく、冷たく、恐ろしい汚れたモノかってことが。たぶん、人間を最低に下げたらこんな感じになるだらう、みたいな真実を知った時、一体彼はどんな眼をするのだらう？きつと怒るんだらうね。

「と、とにかく、教室行きましょう？ね？」

「あら、もうこんな時間じゃない。ルーチェ？珍しくおとなしいわね？」

「ん？うん例によって例の如く……。」

「あー……あれか。孤独な姫のひとりごとか。」

「というか、人間について姫が調べたらどうなるかって感じ？ま、姫は私で、私が姫なわけだけど。」

「なんですか？それ？」

「んー……そうだなー……表と裏の中の裏しか見えない　　とい
うか裏しか見えない悲しい孤独なお姫様になつて考えてみたりみな
かったりー。」

はぐらかしただけです。すみません。さて、姫の時間は終わりだ。少し眠つてもらおう。永遠に眠つてほしいものだけど。そういう謙虚なものじゃない。なんせ、「姫」だし。姫っていうのは、私の別名……みたいなものだったりする。まあ、別人格というか、自分にとってなくてはならないもの。孤独で本当の自分を見せない仮面をつけていた頃の私。悪魔としての私。そして真実の私……。

孤独だった姫君（後書き）

まず、お気に入り登録ありがとうございます！この暑い日に外でアイスを食べるくらいの幸せです。どれくらい幸せか分かってください。

ルーチエが崩壊してきましたねー。こんなのは序の口ですが。彼女はまた少しまともになります。次に孤独の姫が出てくるのはかなり後のほうになります。それと同時に彼女の真実が明らかになっていくわけですが。

シエールはいい人です。故に壊れているわけですね。この世界は基本的にほぼ無法。その中で本当にいい人は壊れているんです。

熱血漢だった教師（前書き）

長め。

熱血漢だった教師

「えーっと……一時間目って何ですか？」

「フェアリー語……げ。ジーニア先生だよ。あの先生、必死なのはわかるんだけど……。」

「熱すぎるのよね……しかも、自分で分かってないし。空回りしてること。」

よくいるパターンの先生だ。妖精の言葉を教えている先生なのだが、熱い授業をするのに生徒はしらけてるため、いつも空回り。悲しいかな。ああいう人ほど空回りしていることが分かっていない。

「ま、わかると思うよ。」

「はあ……。」

そんなこんなで、我が、ノリのいいことでは学園のどのクラスにも負けないという二年A組。

「あ！もしかして、その小さい子犬みたいなの！転校生だよね！」

「はい。シエーンランルス・プライリエンスウェイです。シエールでいいですよ。よろしく願います。」

本当にシエールは礼儀正しくていい子だな……。

「うん！えーっと……とりあえず、次、ジーニアの授業だよね！ラッキー！メモ回していこうよ。」

「おー……リウカもたまにはいいこと言うー！」

「たまにはじゃないもん！あ、私は、リウカ〓ローレン。このクラスの副会長。で、そのケイズ〓オライリエが会長ね。この学園、六年制で、六年クラス変わらないんだよね。だから、メンバーずつとこのままだと思ってて、すっごい嬉しいー！」

「リウカさんですね？わかりました。」

あー……あのテンションについていけるのって幼馴染のケイズぐらいだろうな……ま、みんなリウカのこと好きだけど。

「ってことで、みんな、シエール君に一言！メモで書いて回してこ

！どーせ、ジーニアは気付かないだろうし。名前も書いてね。ドア側一番前のジルクからね。」

勝手に話進めてるよ。でも、さすがノリが一番いいクラス。みんなうなずいている。

「はい。えーっと……君が転校生だね？名前は……」

「シエルって呼んでください。名前、長いので。」

「よし。わかった。えーと、教科書は……」

「あります。」

「ならオツケーだ。さあ、授業を始めようか！」

チャイムが鳴る。うーむ……さすがジーニア先生。チャイム前に入ってくるとは……生徒の天敵だ。

「起立。礼……着席。」

さて、メモの回しあいだ。授業開始よりもそっちのほうが大切なだろう。みんな。さてと、一応メモ回ってくるまでノート取るか。

どうせ、窓側後ろから二番目だし。今日の範囲は……ん？現在完了？あー……あれか。

「ルーチエ。」

後ろからつつかれる。ちなみに後ろはリイン。隣はミリエナ。ミリエナの後ろがシエル。席は自由。まあ、二年にもなると誰がどの席を選ぶかぐらい決まってくるわけだけど。

「暇。」

「仕方ないよ。私だって暇だし。」

私は、わざわざテストを落として、学年総合二十位前後を取っているが、基本的にこの学校で習うことはすべて頭に入っている。落とさずにテストを受けたらすべて満点だろう。なんせ、私の主は暇だとか言っつて、いろいろと私に教えてくれたりする上、家に書物が溢れているのだから。もともと頭は良かったしね。テストを落としている理由は目立ちたくないから。順位は廊下に貼られるから、良ければ目立つわけで……それは困るのだ。

「はい。sinned」

リピート……誰一人せず。このクラス、崩壊してるんじゃないだろうか？いや、学園自体は有名難関校のはず。

「みんな、元気がないぞ。はい。sinned」

元気がないわけじゃないんだけどな……。

「はい！」

「……sinned」

三回目でようやくリピート。ううむ……まあ私もリピートしてないわけだから、偉そうには言えないか。

「この単語は重要だからね！」

sinned

意味は昔。そんなに大事かなあ？まあ、たま

に昔の話を持ち出す精霊もいるわけだから大事といえば大事なんだろう。

「で、これが今回のポイントの文で……はい！これを……ルーチエ！訳して。」

ダルっ！なんだ？今日は厄日か？しかも訳かよ！ああ！訳してない！そっぴや、昨日は面倒で予習をやっていたいなかった！まあ、これくらいなんとか……。

「えーと……」

時間さえ稼げば……直訳できる！普段意識しなくなりだもんな……。

「えー……私は……千年前から……ずっとここに住んでいます？」

「はい。正解！勉強してる証拠だ！」

スマン！先生よ。それは見込み違いってやつだぜ！そもそも、千年前からずっと同じ場所にいる精霊なんてそうそういないっての！

「ルーチエ、メモ。」

「ありがと。」

どうやらメモが回ってきたらしい。しかし困った。一言ね……出会いが出会いだったわけだし……困ったなあ……よし。ここは、無難に……これからもよろしくでいくか……あ、それよりいいこと思いついた！というわけで、それを書いていく。

熱血漢だった教師（後書き）

フェアリー語……妖精や精霊の言葉。そのまんまですね。日本人にとっての英語のようなもの。妖精や精霊と話ができないと魔楽で彼らを呼び出したときに困るわけで。そのため習っているわけですね。ルーチェからしてみれば分かりきったことのようにですが。

強引だった担任

「はい。リイン。」

「……ルーチェ……。」

「オリジナルティーがあつていいでしょ?」

「……はは、うん、いいと思うよ?」

さて、シエールの反応が楽しみだ。と、あと授業終了まで十分か…
…少し寝よう。

「キーンコーンカーンコーン」

「はい。今日はここまで。」

「きりーっ……れーい……。」

「ありがとうございましたー。」

さて……シエールはどんな反応をするやら。

「あの一……ルーチェさん?これって……。」

「なんだと思う?」

「意味分かんないですよ。何語ですか?これ。」

私が書いたのは古代インドシアの言葉。この学校内で訳せる人なんて私くらいのもだろう。

「さあ?」

「訳してくださいよ!」

「ん?ダメだよ?疑問は自分で解決しないと。ま、図書館行っても辞書なんてないだろうけどね。」

うちの家にはあるけど。図書館にない本なのに。うーん……いったいどこから持って来たんだろうか。

「じゃあどうしろと?」

「さあね。私の敬愛するご主人様にでも聞けばあ?」

「敬愛なんてしてないでしょ。ルーチェ。」

「当たり前。」

敬愛してる人なんていないだろう。いたら、その人はすぐさま精神

科に行くべきだ。

「いや、そもそも僕その人知らない……」

「ま、いずれ会うことになると思うよ。その時は喰われないようにね。」

「は？」

「というか、壊されないようにね？まあ、たぶんないとは思っただけど。」

無関係の人を巻き込むような人でもないし、まして私の友人ならば壊しはしないと思う。おそらく。

「というか、興味を示さないんじゃないかしら？」

「……できればシエル相手にストレス発散してくれたらいいのに。」

「とりあえず先生来たわよ。」

ああ……本当だ。背の高いかつこいい感じの女の先生。二十六歳。担任のイーリン・トアイラ先生だ。ちなみに数学教諭。

「あー……とりあえず、転校生だな。おい。前出て来い。」

「あ、はい。」

シエルが教壇の前に立つ。先生が黒板に名前を書く。そして隣にシエルとでかでかと書く。名前の約二倍の大きさだ。

「シエーンランルス」プライリエンスウェイです。よろしくお願ひします。」

「だそつだ。ああ、シエルでいいぞ。シエーンだと女になるしな。年はお前らより一歳年下。特例つてやつだな。」

先生……勝手に決めちゃってるよ……まだシエルはシエルって呼んでくれて言っただけじゃないぞ！

「んじゃ、質問タイムだ。好きに言っただけじゃないぞ。何でも聞いてかまわないそつだ。何でも。」

「えっ……ちよ……まっ……」

一斉に手が挙がる。あーあ……何聞くんもりなんだろうか。まあなんとなく想像はできるけど。ていうか、本当に強引な先生だな。

強引だった担任（後書き）

みなさんはルーチエのような真似はしないように。授業中はちゃんと集中して話を聞きましょう！

嫌すぎた頼み

「んじゃ、マリナ。」

「はいはい！マリナ＝エジェンです！よろしくね。シエール君！フェアリー語についてならいくらでも聞いてください！数学はダメ。で、質問なんだけど、好きな女の子のタイプとか！」

「あう……………」

「質問には答えるよ」

先生の悪ノリ。この先生結構好きです私。

「えと………… お姉さんのな………… 何でもないです！」

シエールの顔が真っ赤になる。ああ可愛い………… ペットにしたい…………！

「次。えーと………… リウカ。」

「はい！んと、学園案内なら任せて！この学園、無駄に広いから自然いっぱいだし。迷ったら帰れないからね。うん。で、このクラスで好きになれそうな女の子とか！教えてくれる？」

「うわあああん！」

うわあ………… シエールが涙目だ。同情。まあ助けないけど。

「うう………… 助けてください！ミリエナさあん！」

えらいな。私もリインも当てにならないことがわかってる。でも甘いな。

「そうか。ミリエナか。なるほど。」

「光栄だわ。シエール。」

先生もミリエナも悪ノリしすぎだよ。かわいそうに。まあ助けないけど。

「ところで、ルーチエ。」

「はい？」

なんだろう。すごく嫌な予感がある。

「こいつについてどう思う？」

「は？」

ちよつと待て。何で私。とりあえず……。

「いい子ですよ。どこぞのご主人様と違って。可愛いし。」

「お前……ご主人様で……気持ち悪くないか？言つてて。」

「別に何も感じませんが。」

たまに皮肉で言ってるしね。別に抵抗はない。

「他には？」

うぐ……それ言われるときついものがある。

「……」

「じゃ、レポートということ。全員な。シエルに自分の自己紹介書いて、写真貼つて渡せ。締切明後日。今日の朝礼は以上。」

ここがクラス内じゃなければ……視界を真つ赤に染め上げてあげるというのに。

「あ、ルーチエは前に来い。」

何やらさつきとは比べ物にならないほどの嫌な予感がする。ああ……

……しらばっくれない。

「せ、先生……何か用ですか？」

「ああ。お前の敬愛するご主人様 エリオスに二日酔いの薬

を作つて持つてきてもらつてくれ。」

「ヤです。」

即答する。絶対ヤだ。エリオスに頼み事なんて エリオス！！

ジェーランス。私の主であり全てにおいて私を超越するモノ。年齢は今年で二十歳。治療師であり、私の同居人。別名、ブレイカー、壊し屋、地獄の王、最強で最凶で最恐で最狂のモノなどなど。どれも当たっているあたりが悲しい。

嫌すぎた頼み（後書き）

ブレイカー。綴りはbreakerだったりする。まんま壊す者っていう意味。恐らく造語かと。ルーチエは彼のことを嫌がってるようにふるまっています。実際はそうでもありません。でもあまり好きだということも恥ずかしいので嫌っているように見せているわけです。

天然だった副担任（前書き）

長いです。

天然だった副担任

「頼む。」

「無理ですね。絶対貸しにしますよ。あの男。」
「四年間一緒にいる私が言うんだから間違いない。」

「いいじゃないか。」

「よくありません。刺されます、挟られます、壊されます。」
「なんせ壊し屋なのだから。壊したいという欲望がどの欲望よりも強い人なのだから。」

「とにかく頼んだ。」

「ふざけないでください。」

「平常点下げるぞ。」

「ご勝手に。」

成績悪くて怒るような人もいないし。私的にはどうでもいい。

「お願いだって。」

「というか先生、全く酔ってるように見えませんが。」

「私じゃない。ミルア先生だよ。」

ああ……ミルキー先生か。二十三歳。本名はミルア・ロンデス。可愛く天然。ドジだけどそこが可愛い。で、ついたあだ名がミルキー先生。国語課担当でうちのクラスの副担任。

「弱そうだなあ……。」

というか、周りに流されてすごい飲んじゃう気がする。

「仕方ありませんね……ミルキー先生ならエリオスもストレス発散の材料にしそうだし……いいですよ。」

「本当か！」

「はい。」

にしても気が重い。天気は快晴のはずなのに、大雨に見える。はあ。
「ところで先生。先生がミルキー先生と仲がいいのは知ってますけど、どうしてそこまで気にかけてるんですか？」

この先生は言うまでもなくさだ。ミルキー先生が酔ってても、見て黙って笑ってそうなのに。

「ミルア……先生は、」

「ミルアでいいですよ。別に。」

「あいつは、酔い方が可愛らしいんだ。すると、職員室中がポワァつとこう……いい雰囲気。男どもも緊張感がないし……変な虫を寄りつけるのは良くない。」

納得。でも……。

「知り合いに一名いますよ？そんな中でも全く無関係な顔してる、なびかない人。」

「……あゝエリオスね……。」

「本人曰く、奴隷さえいれば彼女はいらないですし。」

まあ、アレと常人を比べるのが悪いのだろうが。はあ……どうしてあんな人の傍にいるんだろう私。

「とにかく頼んだぞ。」

スルーかよ！まあ、それが一番上策だよねえ、はあ。

「了解しましたよ。」

そして私は気がついた……次がミルキー先生の授業であるという……とに……。

「何の話だったんですか？」

「ん？お薬頂戴ってお話だよ。」

シエールが何か言おうとした瞬間、ガラガラつと音がして、教室のドアが開く。

天然だった副担任（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！美味しいディナーを奢ってもらっている気分です！これからもよろしく願いします。>「
|) <

おそらく切れた男の理性（前書き）

ミルキー先生が可愛いということしか書いていません。かなり短め。

おそらく切れた男の理性

「皆さんおはようござい……はわー！」

ドアの部分でこける。可愛い……。

「いたた……うう……はう！」

起き上がるうとして、またもやこける。ああ……可愛いなあもう！

「ひゃあー！」

今度は教壇でこける。さすがに見かねたケイズが手を差し伸べる。

ま、普通の判断だよね。ただ、男の理性はぶっ飛ぶだろうね。確実に。

「え、えと！それじゃあ、授業を始めましょう！」

「起立……礼……着席。えーっと先生……二日酔いだったりします

？」

「ふえ！ど、どうして……生徒にはれるなんて……私の威厳があ……

……」

大丈夫ですよ。先生。先生にはもともと威厳なんてモノありませんから。にしても本当に可愛いなあ……これになびかない人がいるのか……ううん……謎。

「そ、それでは教科書六十九ページを開いてくださ……ください
！」

あ、噛んだ。これから萌える何かを持ってこいと言われたらミルキ
ー先生を持っていこう。決定。

「ん？そういえば出席をとるのを忘れていました。ああ、君が転校
生ですね。えーと……シェーンリャンりゅしゅっプリヤイリエンし
ゅウェイ君ですね。うう。すみません……」

「いえ、自分でもよく噛んじやうんですよ。気にしないでください。
というか、こんな名前ですみません。」

だれもがこの時思った。こいつらをお持ち帰りしてえ！と。

「そ、それでは気を取り直して本文に入りましょう。」

ちなみに先生は三分に一回は噛んだ。カップラーメンを待っている間に一回噛むわけで。世界記録かもしれない。そして、帰りに同じところでまたこけた。かわいいそうに……にしても、このままいくと男の理性とやらはとぶに違いない。さっそく電話しなくては。

「携帯出して何するの？」

「エリオスに電話。」

うちの学校は校則が緩い。携帯、音楽プレイヤーはオッケー。ただし授業中に使うのはアウト。ゲームはさすがにダメ。

「珍しいわね。進んで電話なんて。」

「ちよつとね……。」

全国の男性の方々（一部除く）のためにね。しかし今の段階でコール音二十五回。いじめだな。ひどい奴だ。しかも、私が切らないことを承知の上でだろうし。ああ腹立たしいことこの上ない。と、思っているときようやく電話がつながった。

おそらく切れた男の理性（後書き）

なんか書くことないのでこの物語の世界について。

世界はとりあえず地球っぽい何かです。国はそれなりにありますが、ルーチエがいる国はかなり大きめ。なぜなら強い奴らが集まっているからです。戦争に勝ってきたわけですね。この国は気候も大変過ごしやすいものです。強いて言うなら日本より冬寒め、夏涼しめ。法律は特に無し。ただし地域ごとのルール（その地域を治める貴族が決める）なんかはあります。それも無い所つていうと貧民街ぐらい。力は自分で勝ち取れな国ですから、貧富の差は激しいです。科学技術については進んでますが、精霊やらなんやらの力を借りていきますので微妙なところ。とりあえず全体的にどこの国も環境はよろし。汚染されたりはしません。

長かった電話（前書き）

長め。

長かった電話

「エリオス？」

『ああ。なんか用か？』

「とりあえず、もう少し早めに電話に出ようね？」

待たされる側の気持ちになってほしいものだ。本当に。

『で？何の用？』

スルーかよ！

「ちよつとばかりお願いが。」

『どんな？』

「薬を作ってほしいなあと。二日酔いの先生がいてね。かわいそうに思つて……。」

思つたのは私じゃないけどね。

『で？対価は？』

「やっぱりそう来たか。最悪だ。対価なんて……ボランティア精神がない奴だ。」

「ボランティアで。」

『そいつは無理な相談だな。』

ああ……これだから交渉は嫌いなんだ。

「3万。」

『家の中で金回してどうする。』

「ですよええ。えーえーわかってましたとも。ダメもとで言っただけですとも。」

「じゃあ暇つぶしつてことで。」

『薬作りは暇つぶしのうちに入らない。』

「……そこをなんとか。」

『そもそも俺は薬剤師じゃねーし。』

「そうだけど！」

知り合いに薬が作れる人があまりいないんだから仕方がない。いや、

私は作れるけど材料がないし。もう一人いるんだけどそっちは事情により夜しか薬を作らない。その人は本当の薬剤師なんだけどね。

『それだけか?』

「うん。」

『じゃあ、切らせてもらう。』

「ストップ!」

私は必死で考える。どうしたら薬を作ってもらえるか。いや、どうすれば最小限の被害で薬を作ってもらえるか。

「その先生美人だよ。」

『んなこと関係ないね。』

だよ。困ったなあ……………」

「美人から感謝されるんだよ?」

『どうでもいい。興味ない。まあ、お前が俺に泣いて懇願するってなら別だけど。』

この男、たぶん史上最悪なんじゃないのかな…………いや、私の叔父のほうが最悪だけど。

「泣くわけじゃないでしょうが。」

『しかも泣くとしたら俺のためじゃなくてその先生のためだもんな。うわ。急にムカついてきた。その先生壊していい?』

どうしてこう、たいして欲がない　　というかどう考えても欲っていうものが欠如しているくせに、独占欲と破壊欲だけは強いんだろ。食欲も睡眠欲もないくせに。ていうか、なんで私こんなの標的になっただんだ。

「うん。だめだと思うよ。しかも泣かないって。そこまで先生と仲良くないよ。そんなに泣いてほしいなら死ねば? エリオスが死んでくれたら絶対に泣くよ。」

『それは嬉し泣き?』

ひどい奴だ。分かっているくせに言わそうとする。

「さすがにそこまで冷たくありません。というか、多分狂って壊れるよ。」

『つまり、俺のためだけに泣いて狂って壊れてくれると。今から死んでいい?』

「だめ。絶対。何が何でも。そんなことしたら、速攻で世界を壊す。」

「

『冗談だよ。で?どうするんだ?何を対価にする?』

「はあ……とりあえず貸しっことで。」

もうこれぐらいしか思いつかない。こんなことばかりしてるのが平穩を崩す原因に違いない。

『了解。適当に休み時間に持つてく。』

「じゃあよろしく。」

あつけないよな……今まで知恵を振り絞っていた時間はなんだったのだろうか。いや、そういう奴だって分かってただけどさ……

長かった電話（後書き）

題名を電話（のコール音）ととるか、電話（での交渉）ととるかは皆様の自由です。

もう一人の薬剤師の事情はあほらしすぎる事情。後々出てきます。

たった一人だった理解者

「……疲れた。もうヤダ。」

「そんなに嫌いなのにエリオスが死ぬと困るんだ？」

「なんでミリエナにいじめられてるんだ私。うう……。」

「困るよ……一応唯一の理解者だしさ……四年もいたしさ、なんやかんやで結構いい人かもだしさ……私が必要だって言うしね……そんなの今までいなかった……気がするし。はあ、なんでいろいろ甘受しちゃうんだ私。そんなことするから標的なんだよね？ああ……本当、なんで許すかなあ。別に何もかも許せなんて言われてないのに。」

「疲れてていろいろと感情を吐露してる気がするけどもういいや。どうでもいい。」

「そんなこと言われても分かんないよルーチェ……。」

「うん。分かってる。分かってるんだけどさ。なんか愚痴ってみたかったから愚痴ってみた。」

「ルーチェさんっていい人なんですかね？何でも許すってことはいい人ですか？」

「いや、結構執念深いよ？なんとというか……あれが例外なだけで。」

「他の人には結構厳しい。」

「なんで、絶対に心を許したりしたらいけない人間に許してしまったんだ私。分かってたはずなのに。」

「ほら、もう授業よ。」

「ああ……そうだった。なんでか喋ってるうちについてたけど。故に今は音楽室。」

「授業も身に入らない気がする。頭が変な気がするよ……術でもかけられたかな？」

「こうしてみると、ただの恋してる少女よ。可愛いわ。ルーチェ。」

「やめてよ……吐き気がする。マジで。あんなのに恋なんてしたくな

い。そりゃ孤独の姫の世界にいるのは多分エリオスだけなんだけ
さ？それは恋じゃないと思う。そんな優しいものじゃないって。絶
対。」

私も人のこと言えないな……結構独占欲強いかもしれない。まった
く。似たくもない奴に似るもんだ。

「ただの執着か依存か。どっちかじゃないかな？」

「ただどころのもんじゃないよ。かなりすごい。ちよつと狂えば怖
いことになる。」

それが怖い。すごく怖い。何かがあつたら狂つて壊れて傷つける。

絶対に。それを止められるのは認めたくないけれど……たった一人

「ルーチエさん？」

「ん？」

「大丈夫ですか？なんか危なつかしいですよ？本当に術かけられま
した？」

「そーかも。今は頭があんま働かない感じ。ま、どうせエリオスは
もともと声がちよつと変だから。」

変というよりは声が武器になると言つたほうが正しい。あの男のす
べては武器だ。それは多分私もだけれど。確実にエリオスに会つて
から変わつてる。まるで調教されてるような。少しずつ染め上げら
れていくような。そんな感じ。ま、どーでもいーけどさ。

「それ、どうということですか？」

たった一人だった理解者（後書き）

えーと、更新頻度が低くなるかと思われます。私生活が忙しくなったので。三日に一回は更新したいです。とりあえずは頑張れるだけがんばりますね。楽しみにされている方がいらっしやれば申し訳ありません。それでも読んでいただければ幸いです。

静かだった学園内

「ま、会って声聞きゃ分かるよ。名前を呼ばれたらどんな鈍い人でも気づく。何かがおかしくなるのがね。しかも、本人があまり制御しようとしなしいね。まあ安心しなよ。一番影響受けてるのは私だから。」

「でしょうね。私たちはたいして影響ないもの。少し制御してるんじゃないかしら？とところで、どうしてチャイムがならないうえに先生が来ないの？おかしいわ。」
確かにそうだ。みんな気づいているのに喋っているのは都合がいいからだろうけど……さっきから嫌な予感がする。

「仕方ないなあ。少し様子を見てみるかな。でも、職員室が制圧されてたらイーリン先生が気づくはずだし、行動を起こすはずなんだけどね……。」

「なんたって私と同族なわけだし。私ほどではないけれど強いし。」

「でも、チャイムを管理するのは職員室じゃないわよ。精霊でしょ？音楽の先生は音楽職員室にいるし……鍵がかかっているわよ？」

「うーん……とりあえず外でるかな。チャイムがならないことはみんな分かっているはず……。」

あれ？でもどうして避難しろなどの放送がこない？やっぱり職員室が制圧されてる？イーリン先生は？情報が少ない今、やっぱり外に出るのが上策。

「ま、大したものじゃなければエリオスの名前を出せばいいし。」

「そんなにすごいんですか？」

「一部の世界じゃ絶大な影響力を誇るよ。妖界、それから裏世界。エリオスの味方だつて言えば何とかなるね。逆に恨まれて殺されかける可能性もあるから微妙だけど。」

あの男が今まで何をしてきたかがよく分かる。名前を出したらみなさん顔が青くなるってどうよ。たまに赤くなる人もいるけど。怒り

で。

「さて、行きますか。」

「ルーチェ？どうしたの？」

「ちょっと外出してくるよ。みんなはそこにいたほうがいいと思うけどね。危ないかもだし？」

「え？でも……ルーチェ達はいいの？」

「いいのいいの。私たちには幸運の女神様がついてるから。ああ……違うな。そうじゃなくて、最も強くて最も凶悪で最も恐ろしく最も狂った悪魔。すべて冷酷に壊しつくす最悪の存在。味方にすれば最高、敵に回せば最悪。何でそんなの気に入られたんだか。どうせなら幸運の女神さまに気に入られたかったよ……」

「意味分らないよ。」

「だろうね。まあミリエナとリインは苦笑してるけど。」

「ま、じぎに分かるでしょ。漆黒だから結構目立つし。」

「なんせ先祖は黒の騎士だ。別名黒の武器ともいう。この広い世界でたった一つ、漆黒の髪と瞳を持つ一族のモノ。」

「じゃ、とりあえず行ってくるね。」

「そうね。行きますよ。」

「シエルもちゃんとしてきてね。会ってみたいでしょ？」

「すべてを変えていく漆黒の存在に。あれが地獄の王といわれて納得できるようなモノに。」

「ええ。ルーチェさんを手なずける存在には会ってみたいですね。」

「否定できないあたりが悲しすぎるわ。」

「というわけで、私たちは外へ出た……」。

「あまりに静かすぎない？」

「うん。鳥の声すら聞こえないよ。普段ならうるさいくらいなのに。」

「

「とりあえず職員室かしらね。」

「いや。ちょっと待って。やることあるから。」

「学校の外がどうなっているかは知らないけど、どうせエリオスは何

ともないだろうし。むしろ暇つぶしができて喜んでいる気がする。
私との約束は必ず守る人だから絶対にここに来るだろう。それなら
学校内のどこにいるか分かるようにしたほうがいいはずだね。—
一緒に暇をつぶしたいし。

静かだった学園内（後書き）

エリオスが言われたい放題。まあ事実最強ではあるのですが。

特に何事もなかった準備（前書き）

更新が遅くなって申し訳ございません。

特に何事もなかった準備

「何するんですか？」

「ペンダントを出すだけだよ。」

昔、契約のため、そして私のために渡されたペンダント。

「きれいですね。赤紫の触媒ですか？あ、でも六角形じゃなくしてずく型ですね……。」

「うん。もとは赤だったんだけどね。結構珍しいものなんだよ。」

「居場所が分かるんですか？」

「うーん……曖昧だけどね。学校内にいるかってことといたら場所は大体特定できるかな？」

まあ、感覚に頼るところもあるが。その辺は気にせず……。

「この調子だと……家つてことはないね。学校と家の間かな？ま、車だろうからちょっとしたら来れるか。」

赤紫が少しずつ……本当に少しずつ赤に変わっていく。この学校内なら分かるのは私が美術教師くらいのもんだろう。

「ま、とにかく気をつけて捜査しなきゃね。シエール。黒魔楽も楽器にストックためれるよね？」

魔楽は楽器にストックをためることができる。つまり、ストックをためるために、ちょっととした操作をすれば弾いた分ストックがためられ、呪文一つでためていたものを出せるといわけだ。ただし白魔楽は例外。ストックはためられない。

「ええ。結構ためてます。妖精五。結界十。かまいたち十五。龍一ですね。」

「そんだけあれば十分。」

とりあえずのところは、だけれど。まあ、エリオスに会えば何とかなるし。シエール一人ならミリエナが守れる。

「ここで準備しといたほうがいいかな？危険そうじゃないし。」

「うん。そっちのほうがいいでしょ。目立ったことはしないですよ。」

「大丈夫。私の場合は銃と体さえあればどうにでもなるから。ミリエナは？」

たしかに。元人間でもリインは現吸血鬼。身体能力はかなり高い。そのうえ銃器の扱いはプロ並みだ。

「私は大丈夫よ。いざとなればリーグア解放するし。」

ミリエナは体の中に女神がいる。罪を犯し、玉の姿にされた女神。その玉に触ってしまったミリエナは彼女に取りつかれた……といったてもミリエナ自体に被害はなく、それどころか、彼女はミリエナを気に入って何もしないから誰もどうにかしようとは思わないというか利益しかないし。

「ルーチエは？大丈夫だよな？」

「当たり前でしょ。とりあえず剣だけ持つとく。ジャステイス。剣の名前を呼ぶと、私の手に現れる。」

「どうなってますか。それ……」

「ま、なぞの多い剣だから。いろいろと。」

実を言うと、伝説の暗殺姫と呼ばれる彼女が持っていた武器で、ついでにエリオスの祖先だったりする。つまりは、武器だけ人で人だけで武器なわけだ。形状は変えることができる。暗殺姫の武器で騎士で右腕。といつても、彼はこれが原型である黒い鎌となったときしか現れないが。

「しかも人型にならないければ声聞けるの私だけだし……。」

「何か言いました？」

「何も。とりあえず職員室行き。」

職員室のある中学棟まで慎重に進む。と、中学棟と音楽室のある芸術棟の中間程度のところで、大きいネズミらしきモノ、つまりは妖怪に会った。

「あんた何？」

「答える義理はない。」

まったく、近頃の妖怪は人の力を見る目がない。

「ブレイカーって知ってる？」

「ああ。当たり前だ。知らないやつなんぞいない。」

「だろうね。いろいろやってるし。」

「それについてどう思う?」

「怖い。純粹に恐怖の対象だ。」

「まともね。で、私はそのブレイカーの奴隷なんだけど?」

妖怪、青くなる。素晴らしい色の変化だった。

「う………そ………だろ?」

「本当。これ見れば分かるよね。」

リボンをとり、ブレザーの下に着ているブラウスの第一ボタンをはずす。

「何考えてるんですか。」

「ね?分かるよね?」

白い肌の鎖骨の部分に呪いのように刻まれている青い魔法陣のような印。妖精のアルファベットでEとLが書かれている。Eが左上でLが右下。Eの右下とLの左上は重なって二重の円で囲まれている。円と円の狭い間には細かい精霊語がびっしりと書かれている。

「Lは私の名前、ルーチエの頭文字。Eは………言わなくても分かるでしょう?」

エリオスの頭文字。そして、その刻印が青ということは………刻印の意味するところは………

特に何事もなかった準備（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！気分は月が綺麗だったときの気分です。これからもよろしくお願いします。

ブレイカーってすごいよね。うん。

愚かだった妖怪（前書き）

更新が遅くなったのにもかかわらず短め。すみません。

愚かだった妖怪

「……それって主従ですわ……主従の契約の刻印。」

「別の人間だろ……なあ……そうだろ？」

「どうかしら。」

妖怪は襲ってこない。怖くて仕方がない。ブレイカーが。

「さてと。悪いけど死んでもらうわ。」

「待て！待ってくれ！頼む！俺達を統率してる奴について教えるから！本当のネタだ！頼むよ……。」

「あんたみたいな雑魚の情報なんてどうでもいいわ。」

「やめてくれ！俺たちのリーダーは……っていう魔術師だ！」

「そんな変な名前の魔術師聞いたことないわよ。やっぱり大した情報じゃなかったわね。さようなら。愚かな妖怪。」

そう言っただけは、妖怪の脳天に剣の状態のジャスティスを刺した。妖怪は粒子となり、跡形もなく消え去った。制服のボタンをとめてリボンをつけて……はあ。まったく。とっとと信用してくれればよかったのに。

「おい！」

「イーリン先生！職員室は……。」

「職員は全員気絶している。私は外にいたからな。平気だったんだが。高校も同じ。生徒も気絶している。安全なのはおそろくうちのクラスだけだ。」

「そうですか。だろうと思ってました。意外と速かったですね……。結界張って来たから音楽室は無事でしょう。エリオス呼んでるんでなんとかかなると思いますよ。」

「結界……っていつ張ってたの？」

「出る時。シエールと話してた時かな？」

「気づきませんでした……。」

別に隠しているつもりはなかったんだけど。クラスメートにばれた

ら少しややこしいかもしれないと思っただけで。

「とにかく、なんとかしなくちゃな。あらかた片づけてはきたが…
…多いな。雑魚ばかりだが。」

そうか。あらかた片づけてきたのか。ならば、もう大丈夫だろう。

「今日は満月ですよね？」

「おい！」

「月の龍、解放。」

私の体内から銀色をした巨大な龍が出てくる。鱗は白銀で虹色に光る。まるでオパールのように。そして、それが彼女の名前だった。

「オパール。悪いけど人型になって。目立ちたくないし。」

龍は頷き、美しい女性になった。年は二十程に見える。私と同じ銀の長い髪。瞳は金。

「……本当にトラブルに巻き込まれるのがお好きなんですね。」

「好きじゃないよ。」

「ル、ルーチエさん……？何が……」

愚かだった妖怪（後書き）

ルーチエは好きでトラブルに巻き込まれているわけではありません。本人は日常を望んでおります。そう見えませんが。

実在した伝説の存在（前書き）

更新が遅れて申し訳ございません！長めです。

実在した伝説の存在

「ドラゴン使いの伝説って知ってる？」

「え、ええ……有名ですから。」

どんな伝説かというところ、その昔、龍は人間によって迫害されていた。龍たちは保身のために人に変化し、人として生きていった。そんなとき、龍であるところある青年が人間である女性に恋をした。二人は仲よくなっていく。青年は彼女に龍であることを隠せなくなってしまう。そして、ついにはばらす。彼女は微笑み、青年に対する行動を変えなかった。青年の全てを受け止めた。二人は結婚し、女の子を産んだ。その子供は……

「美しい人の体……でも、中に龍が住んでいた。」

「そう。彼女が呼べば彼女の体内から龍が出てきた。彼女自身も龍の力を持っていた。」

龍たちは喜んだ。なんせ、美しすぎるが完全なる人の形。なのに、龍の力を持ち、体内に龍が住んでいると。そして、人と結婚し子供を産んでいく。そのような人と龍のハーフのことをドラゴン使いと呼ぶ……。

「で、その子孫がいるわけ。ま、龍なんてよっぽどのがない限り不老不死だしね。それでもかなりの重傷を負ったら死ぬからね……。少なくともなってると思うよ。私はエリオスにこの力をもらったってわけ。エリオスは純粋なドラゴン使いだけどね。イーリン先生も。」

「ああ。うちの家とあいつの家は全員純粋なドラゴン使い……いや、だった。かな。あいつの家の場合は。」

「そうですね。なんせ、エリオス以外のジェーランス姓は死んでますから。」

「え……？」

「ああ、シエールは知らないよね。ジェーランス家ってね、みんな

死んでるんだよ。生き残ってるのはエリオスだけ。私なんかよりもずっと孤独。」

エリオスは本家の長男。本家の人は後のエリオスの主が殺し、ほかはそいつに命じられてエリオスが殺した。そこまで語るつもりはさらさないけれど。

「そうなんですか……。」

「うん。にしても……本当にかわいそうね……ここにいる妖怪。もう校内だよ。」

赤紫は赤に変わりつつあった。

「たしかに……。」

「エリオスが来るってことは全部壊されるってことだもんね……ふう、ご愁傷さまだね。」

その通りだと思う。同情はしないけど。

「容赦ないからね……。」

「誰が容赦ないって?」

「ブレイカー。」

私たちの目の前には、漆黒の髪に漆黒の目をした長身で美しすぎる男が立っていた。

「あ……赤紫が赤になってます……。」

「ま、厳密には赤じゃないんだけど……。」

これが赤になるときなんて、私とエリオスが抱き合ったときだけだと思う。

「お前、名前は?」

「え、あ、シェーンランルス≡プライリエンスウェイです。シェールで結構です。よろしくお願いします。」

「ふーん……シェーンランルス≡プライリエンスウェイね。俺はエリオス≡ジェーランス。よろしく。」

「……はい。」

どうも、シェールもエリオスの声が自分に影響を及ぼすことに気がついたようだった。

「声に……術とかかけてます?」

「あー……あんま自覚ない。いや、あるけど制御する気がない。こちのほうで落とすしやすしい。」

「は?」

どうやら純粋なシエルにはよく分からないようだった。何を落とすのか。いや、分かっても認めたくないの間違いかもしれない。

「えっと……何を……?」

「女。」

即答でした。ま、女誑しではないけどさ。

「ま、血筋。生まれつき。全部武器だから。結構役には立つ。顔と声と口説き文句。それがよければ金には困らない。親から叩き込まれたちよつとした処世術。」

いったいどんな家で育って来たんだと言いたくなる。知ってるけど。

「言つてて辛くないか……それ。」

「ない。なんなら落としてやるうか?」

「……すまん!吐き気が!」

「大丈夫。数分で吐き気はおさまって、楽になれる。」

「……ルーチエ。あとよろしく。私にはこの男を止められない。というか、下手したら本当に落とされそうで怖い。」

「先生。彼氏いたんじゃないんですか?」

ミリエナってなんでこう、痛いところを突くのがうまいんだろう?

「いるけど!でもなんかものすごい無理!拒める自信がない!」

「……正直ですね……」

「仕方ないだろ!絶対この顔でこの声で口説かれて拒めるのはいいから。ルーチエぐらいだつて。」

まあ……本気でやられたら拒めない気もするけど。

実在した伝説の存在（後書き）

エリオスさんは鎖外せば一番狂ってて、外さなければまとも。最強にして、最狂。そして最凶。

残念だった友人たち（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！これからもよろしくお願
いします！あと、更新が遅れてすみません。

残念だった友人たち

「やってみるか。面白そうだし？」

「ちよっ！本気でやめさせてくれ！ルーチエ！」

「あー……うん。とりあえずやめたほうがいいと思う。」

「んじゃ、お前で。」

ものすごく困る！イーリン先生みたいなのをかばわなきゃよかった。

「貸しもあるし。」

「……もしかしてストレスたまつてたりする？」

「お前をずたずたに引き裂いてばらばらに解体して全部を壊しつきたいくらいには。」

どうやら相当たまっているようだった。

「お願いだから他のを相手にしてくれないかな？」

「考えておこう。」

絶対考えないに決まってる。ああ、なんでこんなものというんだろう？

「で？状況は？なんで誰の声も聞こえないんだ？いや、まあなんとなく分かるけど。」

「エリオスが考えてる通りだと思うよ？みんな気絶。妖怪たくさん。」

「使えるのは？これだけ？」

これだけってな……いや、まあ少ないんだけどさ。

「……うん。少なくともごめん。」

「シエルは？ただの足手まといってことはないんだろ？」

どうしてこう口が悪いんだろう？もう少しまともな言い方はないのかと言いたい。

「自称黒魔楽師。」

「何級？」

魔楽師は級がある。一番すごいのは特級。次から一級、二級……と続いていくわけで。最低が十級。

「一級です。特級は試験対象外だったので。あれ、十五歳からでしょう?」

「実力だよ。年も性別も身分も関係ない。実力さえあればどんな人間でもかまわない。」

「……一応特級レベルだとは……」

「ま、それだけあればいいか……にしても本当に少ないな……仕方ないか。久々に校内を荒らすということだ。」

つまり……

「ま、あと五人いれば充分だろ?」

友人を呼ぶつてことか……実力に関しては多分国内屈指。ただし性格に問題ありの。

「一人に電話かけたら全員来るよな?というわけで、ルーチェよろしく。」

自分の友人なのに……どうして私……よし。一番説得しやすい人でしょう……

「もしもし?アイリア?とりあえず、招集だそうで……ま、暇つぶしにはなるけど……」

『……それって逆らったらどうなるの?』

「ご想像にお任せします。あ、ストレスたまってるって言って……」

『今すぐそっちに行くわ!全員で!どこ?』

「えっと……学園の……中学棟付近かな?」

数分……というか三十秒ほど経つて

「何考えてんのよ……うふふ……そうよね、何も考えてないわよね。分かってるから言わないで。私たちのその時の状況とかそういうのは無視なのよね。知ってる。ええ。知ってるわ。」

「別に全員来いとは言ってないだろ?ただストレスがたまってるって……」

「それで充分脅しなのよ……あなたの場合。」

だろうね。まったく、みんなして人がいい。ま、五人ともエリオスと中学の時からいるんだからいろいろと分かっているんだらうけど。

「で？何があつたの？エリオス……僕らだつて暇じゃないんだよ。いやまあ僕は暇で暇で思わず拷問しちゃいそうになるくらい暇で仕方なかつたけど。」

「魔術師のくせに危機感のない奴だな。今回の黒幕、お前らだぞ。」
「僕は僕。他は他。まったくどいつもこいつも好き放題やってくれるよね。ていうかとつと君が壊してるもんだと思つてた。」

「あんな、俺だつて暇じゃないの。で、状況は簡単。学校が崩壊してる。生徒、教員……何もかもが気絶だとき。あと、たぶん精霊が理性失つてる。」

それは今初めて聞いた。さて……一応説明。さっき私が電話したのはアイリア。喫茶店経営してる女の人。ドラゴン使いただけどちよつと特殊。魔術師のハイリツ、これはエリオスの幼馴染。拷問狂。リンが吸血鬼になった原因の吸血鬼のケルシャ、それと私の従兄妹で双子のアリスとイリス。ペガサス使い。二人で一つのペガサスを操る。以上。

残念だった友人たち（後書き）

登場人物がたくさん増えるの巻。その中で主要二人に関わってくるのはハイリツさんとアイリアさんかな。種族的にというかなんというか。ネタバレになるから言いませんが！

ハイリツさんはゴーもんきょーです。おそらく私の書く小説内で一位二位を争うSです。それに惚れちゃったアイリアさんは残念な人です。無自覚Mです。ケルシヤはKYです。双子（兄）は普通です。え？妹はって？私の書く小説内で一位二位を争うエロ……残念な方ですよ？いやまあ白い野郎には負けると………思いたい！

ところどころに挟まれた私情（前書き）

更新遅れて本当にすみません。またちょっと遅くなります。

ところどころに挟まれた私情

「何をすればいいんだよ？俺たちは。ま、戦力が少ないところをみるよ……」

「そ、協力要請。」

「お前の口から協力なんて言葉が出てくるとは思わなかった。」

「えーっと……たぶん意味合いは協力要請じゃなくて、手伝わなきゃ壊す的な脅迫だと思う……」

「ルーチェ……本当にいろいろかわいそうだよ……エリオスの言ってることがちゃんと理解できてるって……」

「ええい、そこ！憐憫の眼差しを向けるんじゃない！そういうラインだっけ理解できているんだから同じくかわいそうだろう！」

「ただ、それじゃあまりにつまらないだろ？せつかく全員で愛すべき母校に来たわけだ。生徒の成長を尊敬する先生方も見たいに違いない。しっかり成長したところを見せてやろうじゃないか。」

「皮肉たつぷりだ。よっぽど先生や学園が嫌いなんだろうな……」

「そうね。いい考えだわ。」

「というわけで……好きにやっつけていい。好きにしろ。」

「は？」

「好きにやっつけていい。何やってもいい。俺が許す。どうせここは俺たちの領域じゃないか。そこを荒らされて黙ってるわけにもいかないだろ？目にもものを見せてやるっぜ？」

「いったいどんな権限があるんだと言いたい。それでも、まったく何の権限がなくても何となく従う気になるのはエリオスの力だろう。」

「マジで？」

「うまくいけば精霊にも恩を売れるだろ。いい話じゃないか。」

「責任は？」

「そんなこと考えなくていい。責任取るようなことをしてるわけじゃない。あくまで学園を救おうとしてるんだ。学園が半壊しよう」と

俺たちの知ったことじゃない。個人的には学園全壊しろ。それでも何かあったら俺がなんとかする。思う存分やっちまえ。どうせストレスたまつてんだろ？何も考えずにやればいい。んで学園全壊しろ。」

本当に……よくやるよと思う。それでも信用できる。何をやっても何とかなると思えてくる。それほどエリオスはすごいということだろう。私じゃ到底できない。どんな貴族よりも貴族らしい。あと、やたら途中に私情が入ってましたけど、それはどう対処すればいいんですかね。奴隷として。

「グループ分けは？気になったり気にならなかったり……」

断定口調に絶対しないのはアリス。なんでかこの子は断定しない。するときは、よっぽどヤバい時だ。

「適当。」

その一言で適当にグループを作れる人達ってどうなんだろう……ま、いいけど。ところで誰かエリオスの私情にツッコもうよ。

「ルーチェさん……エリオスさんってすごい人だったんですね……尊敬します。」

「うん。すごいかどうかはともかく、カリスマ性はあるよね。あと、尊敬はするな。この世にいるすべてのもののために。ま、それはおいて、適当にやろうよ。どうせ私たちは四人で一組だろうし……」

「イーリン先生は？どうします？」

「あー……一人でどうにかするよ。」

イーリン先生は弱くない。一人で何とかなるだろう。

「じゃ、適当に散りますか。」

すべて適当。なのに完璧。これってどうよ……ま、いいけど。

「さてと……どうする？」

「んー……まあその辺歩いてたらなんかに会っでしょ。」

「適当だねー……ま、確かにそうなんだけどね。」

「派手にやっついていいらしいね。」

責任は全部エリオスに行くみたいだし。学園全壊して欲しいっぽい

し。私たちはとりあえず中学棟の屋上へ向かう。そこから学園全体を見渡せばいい。

「うーん……見晴らしがいいわねえ……七割が緑だけど。」

「まあね……にしても皆さん派手にやってること。」

まさか快晴の日に学園で稲妻を見ることになるとは……おそらくハイリツの魔法。それから白い光。これはアリスとイリスの力によるものだろうな……どいつもこいつもエリオスの私情と自分の欲求を最優先かよ。もはや学園の一部ハイリツとかいう野郎のせいで一部壊れてるよ。

「ていうかもう半分くらい倒れてるんじゃないですか？」

学園もな。そろそろ危ういぞ。

「かなあ……あれれ？ねえ？ルーチェ？ほらあそこ……えーっと……

……もう！こんな時にリウカがいれば……あ、思い出した！特別倉庫棟だ！」

特別倉庫棟

特別倉庫でいいじゃんと思う

は他の棟

と少し離れた場所にある。一体中に何かあるのかは不明。ものすごく大きな南京錠がかかっていて、噂によると創立当時からあるとかつまりは魔楽を人々が習うようになってからだから千年前。信憑性はけっこうある。なんせかなり古いし。

「ほんとだ……めちゃくちや負のオーラが……」

真っ黒。真っ暗。なんというか、倉庫全体が黒々とした霧で覆われていた。

「行ってみますか。」

ところどころに挟まれた私情（後書き）

ところどころに入っている私情は皆の思いでもありません。エリオス達は特に学園が好きではありませんからね。ハイリツは色々あってもそもそも教師が好きじゃないし。双子と吸血鬼はそこまで何も感じてないでしょうけど。とりあえず憂さ晴らししようぜなノリで。

妖怪御殿だった倉庫（前書き）

有言実行。本当に更新が遅くなってしまった……すみません。

妖怪御殿だった倉庫

特別倉庫棟へ行ってみると、そこには何億という妖怪に覆われている倉庫があった。

「エリオス、面倒だからってほったらかしにしてたな……」

これだけ黒くなってて気づかないわけがないし。

「うーん……どうしてここに多くの妖怪が集まっているのかしら？」

「中に何か妖怪が好むような何かが入ってるんじゃないですか？」

なるほど……シエールの意見ももつともだ。いつそ倉庫の中身を学園中にまき散らしてしまおうか……そうすりゃ学園も全壊するだろうし。などと不謹慎なことを考えていたらケルシャがやってきた。

「あ、リイン？」

「あ……ケルシャ？さすが。あの中で一番のお人よし。ほったらかしにはしないんだ。」

「気になってな……うーん……これはこれは……お見事としか言いようがないな……」

ケルシャはあの中で一番のお人よしだったりする。というよりも、他があまりにひどすぎるだけなんだけどね。

「だよね。まるで妖怪の御殿みたい。ねえ。この中って何が入ってるの？」

「いや、それがな、俺たちも知らなくて……エリオスとハイリツとアイリアは知ってるみたいだったんだが……なんでもアイリアを救うときに興味本位と、アイリアの気晴らしのために中を覗いてみようってなっいたらしい。」

なるほど……アイリアはちょっといろいろあつて心に深い傷を負ってしまった。その時の話だろうけど……

「何かな？死体とか？っていうかなんで三人はケルシャや双子に言わなかったの？」

「なんでもものすごくヤバいものだったらしい。これは冗談では言

えないなとかつて言ってた。死体なら……別にあいつらが隠すようなものじゃないだろうし……」

まあ彼ら本人が死体を大量生産してるしね。

「中こじ開けてみる？」

「でも変なものが出てきたらどうします？それに変にいじったら学園で問題になりますよ？」

「だよなあ……なら電話でもしてみるかな……面倒だなあ。」

「そこにはね、人の死体が入ってるんだよ。僕らが言わなかったのはアイリアのため。ね？エリオス。」

「ああ。そこにはな……女の死体だけがごろごろ入ってるんだよ。」

惨たらしく殺された女の死体だな。」

「なんだよ……お前らいたのか？」

「ええ。ついさっきに来たのよ。そこに入ってる死体は……私と同じ思いをした人たちの……まあおそらくけど……昔入っていたものは、新倉庫に入ってると思うわ……」

アイリア、ハイリツ、エリオスが来ていた。まあ私たちに押し付けることで罪悪感に駆られてとかではないだろう。にしても……アイリアと同じってことは、現学園長に……強姦に近い行為をされた人々ってことか……その中で生徒じゃなかった人だろう。生徒殺したらものすごい問題になるし。」

「……じゃあ見ないほうが無難？」

「だろうね。まったく……処分してしまえばいいのに。」

私もそう思う。あの男は死体が好きなのかな？まさかね……さすがにそんな人間とはあまりお付き合いしたくない。

「なんで処分しないんでしょう？」

「分からないわ……」

「分からなくていいよ。アイリア。あんな男の気持ちなんて……分からなくていい。」

だよ。ハイリツの言う通りだ。にしても……いったいなんで？普通処分する。この世の中では人殺しなんてしょっちゅうだ。それを

処理する仕事の人もいっぱいいるのに……（給料がいいのとあとは死体マニア）まあその人たちに頼むと噂が回るか……でも自分で処分すればいいだけの話。

「もしかして……」

もしも……もしも……死体に何か役目があるとしたらなんだ？無惨な死体の山を誰かが見たら……驚いて……普通はそこから逃げる。そして二度とそこには入らなくなるだろう……知り合いにも近づかないように言うだろう……ということは、死体の役目は……

「人をここを近づけさせないようにする……」

そんな理由は限られてくる……見られたくないものが何かあるからだ。ああ、エリオスやハイリツは分かっているみたい。教えてくれたっていいのに。これじゃあ強行突破しかないじゃん。

「見られたくないものって……何？」

教えてくれる気はないようだ。なら仕方がない。

「よし……開けてみよう。」

扉の近くの妖怪たちを剣で叩き切る。南京錠もついでに壊す。ちなみにジャステイスには傷一つない。

「やとと……」

妖怪御殿だった倉庫（後書き）

エリオスとハイリツとアイリアは基本的に仲が良かったようです。後の双子とケルシャは彼らからすればおまけみたいなものだった様子。

忌み嫌われた岩（前書き）

更新が遅くなって本当に申し訳ありません！！PV5500を超えました。ありがとうございます！皆様のおかげです。拙い物語ですがこれからもよろしく願います。小話を書きたい……。

忌み嫌われた岩

ギギギイっとな音がする。中に入っているのは、惨たらしく殺された女の人たち。私はそれをどけていく。手に血が付くが気にしない。その中には去年別のところに転勤したと思われるいた教職員もいるがそれも気にしない。まあエリオスの奴隷だし、この程度で驚くほど優しい世界を生きてない。ま、友人たちはちよつと驚いてるけどね。私はもう後戻りのできない世界にいる。彼らとは違って。

「あつた……何これ。」

山の一番下の死体をどけると、そこには大きな黒い石……というよりは岩。

「なんでこんなものが隠したかったの？」

死体を使って……いやまあ本人からしてみれば一石二鳥だったんだろうけどさ。

「シエール……ちよつと来てくれない？」

「いいですよ……うわー……よく一人でこの量どけましたね……血のにおいがすごいですよ。でも……どうして……どうして同じ人同士なのにこんなひどいこと……」

どうしてもこうしてもない。邪魔だったのだ。何でそんなことが分からないのかな？それとも分かる私がおかしいの？私からしてみれば死体が腐ってないだけだと思いますよ。精霊のおかげだろうけど……さすがに血のにおいは消せなかつたみたいだ。ま、倉庫を開けない限りにおいは漏れないからいいんだけどね。

「これって、黒魔楽の触媒？」

黒い岩を指さして聞いてみる。まあこういうことは専門家に聞くのがいいよね。

「ええ……そうですね。ただ……これは……なんていうか……黒魔楽師でさえ忌み嫌うものです。伝説にも出てきますね。」

「伝説？」

「はい。ウィツティーディアの黒真珠っていう伝説です。知りませんか？」

「知ってるよ。ウィツティーディアっていう貧しくも優しい少女が道端で死にかけていた貴婦人から黒真珠のブローチをもらう話でしょ？それを大切にしていたウィツティーディアは同じような貧しい男の人と結婚するんだけどその男の人に暴力を振られて、黒真珠に願ってみた。お願いです。私を彼から救ってください。そうすると黒真珠が動き出して、彼を食った。その後ウィツティーディアは残酷だけど優しい黒真珠の精霊と結婚しました。めでたしめでたし。」ちなみに結婚した後ウィツティーディアは黒真珠に食われてある意味永遠一緒に過ごすことができずというオチがあったりする。その黒真珠は現在精霊界にあるんだとか。

「その黒真珠が実はイアノリスの岩……この岩ですね……の一部だと言われています。黒真珠は本当は真珠じゃなかったってことです。」

なるほど……つまり、この岩は残酷なものなんだ。黒真珠がウィツティーディアに優しくしたのは好きだったから。本当はすごく……すごく残酷。私たちと同様に。

「これってどうすればいいのかな？」

「浄化ですね。これは悪意の塊ですから……でも一流の白魔楽師でも三日は寝込むそうです。悪意の塊なんて言い方、僕嫌だけど。」

「ふーん……」

いやまあシエールの意見はどうでもいい。大切なのはミリエナは使わないほうがいいってことだ。寝込まれると困るし。

「ま、なんとかならんこともないか……この程度なら。」

「は？」

「ああ……シエールは知らないんだっけ？ま、見てなよ。」

私は自分の手にジャスティスを刺す。血が溢れてくるけど気にしない。

「我、月巫女はこの血を月に捧げよう。そのかわりに月に棲む精霊

よ、力を我に貸せ。」

銀色の光が私を包み込む。銀色の風が舞い上がる。

「はあ……あなたって人は……また厄介事に巻き込まれたんですか？違いますね。自分から入っていったんでしょう……まったく。だからあんな男のそばにいてはならないと……本当にあなたたち親子はいつもいつも……ヒトの言うこともきかず……勝手に決めて……」
そして、銀色の光に包まれた月の精霊が私の目の前に現れる。説教とともに。

「とりあえず説教やめて。人の決めたことにいちいち口出ししないで、とりあえずこの岩浄化して？」

「これは……イアノーリスの岩じゃないですか。なんでこんなものが、こんな学校にあるんです？」

「知らないよ。エリオスにでも聞いて。頭使うの疲れたし。」

「嫌ですよ。あんな穢れた人種……いえ、化け物でしたか。どちらでも構いませんがね、そんなものと話すのはごめんです。見たくない。はあ……言っときますけどこれを浄化するのは結構骨が折れますよ。あなたの血がかなり必要です。それでも浄化しますか？」
何をばかげたことを言ってるんだろうこの精霊は。

「当たり前でしょう？出血多量なんていつものことよ。」
だって同居人があれだし。

「……分かりました。浄化を開始します。」

「ル、ルーチェさん？いつたいこれって……？」

「ん？あー……後で説明する。」

まだ血は溢れている。しかし、血は地に落ちる前に消えていく。月の精霊が地上に現れ、力を使うには月巫女と呼ばれる者の血が必要なわけで……つまり、血は地面に落ちる前に月の精霊の力に変わっていつてるといふことだ。真っ黒の岩が少しずつ白くなっていく……月の聖なる力によって浄化されていく。そして

「できました。これでいいですか？」

真っ白になった。悪意も全く感じられない……むしろ何か清い力を

感じる。

「ええ。御苦労さま。解放するわ。」

「わかりました。もう二度とややこしい場面で呼ばないでくれたら嬉しいのですがね……」

「それは無理だと思っ。」

なんせ、なぜか私は厄介事に首を突っ込んでしまっ子だから。同居人があれだし。裏世界の住人だし。

忌み嫌われた岩（後書き）

更新が遅くてすみません。ルーチエさんの意味不明な力については次話説明を。彼女は結構色々スキルを持っています。スキルの多さでいくと一位はハイリツです。で、多分二位がルーチエです。エリオスはそんなにスキルはありません。ただただ壊すだけです。

恨まれていた現学園長（前書き）

長め？

恨まれていた現学園長

「で？さっきのは何ですか？」

「外に出てからね。」

外に出る。うーん……新鮮な空気って素晴らしいよね。

「で？」

「そんなに言わなくても教えてくれるって……」

「くれる？って……」

「頭使いたくないからね…… エリオスに聞いてね？」

「なんで俺……」

そりゃあ仕方がない。なんか一番ちゃんとした説明できそうだし。

まあハイリツでもいいんだけどさ。一番詳しいのはエリオスだろうし。

「シエル…… 月巫女って知ってるか？」

「知ってたら聞きません。教えてください。だめならいいですけど……」

だよねえ…… まあ結構そのまんま感じだから想像力を働かせれば分かるだろうけど。

「だめじゃない。月の精霊を召喚することはどんな魔楽師でもできないだろう？」

「そうですね。」

月の精霊はどんな魔楽師でも召喚できない。他にも星、太陽等々結構そういう精霊は多いわけで……

「でも、月巫女の一族は召喚できる。ただし血が必要だがな。で、ルーチエの母親は月巫女の ネイレストの一族の直系。ということでその娘にもその能力は宿っている。こんなもんでいいか？」

「すごいね。完璧だよ。まあ補足すると、月の精霊の力はすごく強くてね、特に浄化に優れているんだよ。まあ不要な説教も付いてくるけどね……」

月巫女は白魔楽師に似てるのかもしれない。ちなみに、月巫女以外には星巫女もいる。

「そうなんですか……大変なんですね。」

「何が悲しいって普段から散々出血しているせいで多少血がドバドバでようが何も感じなくなっちゃったことだよな。」

「まあ自業自得ってことで……ね？ほら、出血だって悪いことじゃないんだよ？吸血鬼には好まれるよ？」

「嫌だよ……そんな微妙な……はあ。」

「ため息ついたら幸せが逃げてくわよ。」

「もしそうなら世の中の人みんな不幸だよ。」

「それで？あの岩、どーするのさ……まさかと思うけど僕に轉移させるつもりじゃないよね？」

「わーハイリツすごいね。あれって白魔楽の触媒の原料だからね。ミリエナの家まで魔法で運んでもらおうと思って。」

強力な悪意の塊を浄化するとそれは強力な聖なるものとなる。これ常識。

「分かったよ……貸しね。」

「はいはい。」

一瞬にして岩は消える。さすが最強の魔術師。貸しについては……まあエリオスに貸しを作るよりずっとましだしいいか。

「ハイリツすごいね……これで少しは妖怪も減ったかな？」

「まあ少しは減っただろうな。」

少しね……ああ悲しい。こういうの、専門じゃないのに。まあオパールも頑張ってくれてるみたいだしいいけどさ……

「もうやだ……家でゆっくり寝たい……」

「はいはい。じゃあまあ頑張って。」

「……もう十分頑張った……」

「ていうか、あの岩どけちゃっていいんですか？」

「先代の学園長はいい人だった。まあ腹黒かったが……」

ああ、らしいね。ここの学園長はとある一族が代々継いでるらしい

けど先代……つまり今の学園長の父親はものすごくいい人そうにみせかけてものすごく腹黒かったらしい。

「いい人だったわね……その分腹黒かったけれど。」

「多分この岩のことも知ってたんだろうね。」

「きつと自分の息子の性格も熟知してたに違いない。」

「ここを死体置き場にしなさい。くらいしか言わなかったんでしょうね。自分がここに置いていたものはわざわざ作った新倉庫に入れて……」

「いい人だったよな……俺たちが問題を起こしても笑ってるだけだった……」

「目は笑ってなかったけどな。」

もういろいろ微妙だな……いい人なのか悪い人なのか……というかお前ら問題起こしすぎだろうと思うのは私だけかな？

「わざと気付かないふりして問題起こしまくってたよな。僕ら。」

「卒業式の日に笑って俺たちにこれで少しは楽になれるって言って喜んでたよな。」

こいつら、どんだけ悪いんだよ……ってまあ知ってるけど。昔の話は聞いたことがあるし。

「ま、とにもかくにも今の学園長は知らないだろうからな。この岩のことなんて。」

「そうそう。親の七光りだし。」

「能力ゼロだし。」

「あんな奴死んじやえばいいんだよ。ま、僕が殺すけど。」

「今不穏な言葉が聞こえて来たんですけど。」

ああ、シエールは知らないもんなあ……ハイリツとアイリアと現学園長の関係。

「ま、簡潔に言うと、現学園長がアイリアを犯しかけて……」

「それをハイリツが救ってあげて……」

「現在二人が付き合ってるってことだね。」
「そういうことですな。」

「なんでそんな人が学園長になつてんですか……」

「仕方がないよ。先代の子供が一人しかいなかったんだから。先代ももう年だしね……だから、僕が殺すんだよ。あいつを……いつかね。絶対に殺す。生まれたことを後悔するくらいに貶め、辱めながら。」

ま、仕方がないか。現学園長が悪いということ。自業自得。

「だからって……殺さなくてもいいのに……」

シエールは純粹すぎるよ。悪に善で刃向かったってこの世界では無駄だ。裏の世界で生きるなら、悪には悪で刃向かい、いつだって殺す準備をしておかなくちゃ、自分が殺される。ハイリツを含め、私たちが生きてきたのはそういう世界だ。

恨まれていた現学園長（後書き）

ルーチエの言う私たちは自分やハイリツやエリオスのこと。ちなみにこの話で過去が悲惨な人ランキングを作ると一番すごくて歪んでるのがハイリツ。一番傷になっているのはルーチエ。ほぼ乗り越えたのがエリオス。当時一番苦しんだのはアイリアとリンだと思われま

壊れていた破壊者（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません！

壊れていた破壊者

「で……精霊はどうする？」

「大丈夫。なんとかしたから。」

「いったい、この男は何をしたんでしょうか……精霊たちに同情したくなる。」

「エリオスさん。本当にすごいですね。」

その瞬間……今まで静かにしていたものが荒れ始める。少しずつ積みもっていたものが抑え切れなくなっていく……漆黒の獣が起きる。

「……ルーチエ。俺は疲れた。」

「は？」

「幽霊が怖い奴がお化け屋敷に入ったら疲れるだろ？」

「まあそうだね。」

「俺はさつきから怖い思いをしてるんだ。精神的に疲れた。というわけで先帰る。」

「そんなの認めません。」

そんな理由で誰が認めるかっつの。

「何が怖いんだよ。」

「自分と他人。」

「……真剣に現在やばかったりする？」

「ああ。というわけで、こっから先はお前が適当に頑張つて。じゃ。」

「はあ……さてと」

「追う。」

「さっきの聞いてた？エリオスが自分から引くってことはよっぽどだよ？」

「知るか。あんな臆病者の言うことなんて聞かない。自分のなかにいる化け物が怖いのも、それを隠して笑ってる自分が怖いのも、そ

んな自分を信用してる人間が怖いのも、そんな人間を簡単に裏切れる自分が怖いのも、純粹に生きることが出来る普通の人が怖いのも全部知ってる。気持ちも分かる。それでも勝手に逃げるのは許さない。」

どうせ逃げるのならば……ともに冥府の果てへ。

「なんでそんなにエリオスさんは人間失格って感じなんですか？」

「取り巻く環境が悪かったんだよ。あとは……ま、本人の強さかな。」

「強いことはいいことですよ？」

シエルは全然分かってない。自分がエリオスや私をズタズタにしてることに、この汚い世の中の理屈も。何一つとして分かってない。

「あいつは強すぎた。同類以外はみんなあいつを心の底では怖がってた。僕だって最初は怖かったしね。いやまあ後々話聞いたら向こうも僕のこと怖かったらしいけど。まあそれはともかくあいつは皆が自分を恐れることを知ってた。だから人間失格な感じになっちゃってるわけだね。はあ……怖いものは怖いよねえ……ま、僕は大丈夫だけどさ。どうせ同類だし。あいつ曰く憎悪の塊だしね……でも他の人たちは行かせないほうがいいよ。特に耐性のないのはね。ただただ地獄を見るだけだし。」

「全員ついてきなさい。」

冷酷だと思う。私は高所恐怖症の人に高層ビルに屋上に連れて行くようにしているのだから。

「まあ、どこに行くかは分かっている。大丈夫。私は見捨てない。絶対に。怖がらないし見捨てない。裏切らないし痛みを与えることもしない。そのかわり救ってみせる。というわけで、皆さんに危害は加えさせません。だからついてきなさい。」

「はあ……なんで怖くないのよ。おかしいわ……」

「同類だからかな？私も人間失格っぽいからね。大丈夫。絶対に何もしないようにするから。危害は加えさせないよ。」

絶対にそんなことはしない。もしもエリオスが狂ってたとしてみんなには危害を加えないようになんとかする。ように努力する。最悪ハイリツ頼みで。

「まあせいぜい頑張っただけ。できる限りの援護はするし。ていうか、ルーチエのほうは危ないね。今。」

「何がよ。」

肉体的に破滅に向かっていこうとしてるのは知ってるけど？

「ん？分かってないねえ。これだから　　は……いいかい？君があいつを救うのは無理だ。分かっている？この世界に救いなんてないよ。あるのは少しの幻想だけ。あいつを救えるなんて傲慢だ。愚かにもほどがある。絶対不可能なんだよそんなこと。この世界では救われたいのなら、永遠に幻想を見るように自分で暗示でもかけなくちゃ。」

これだからこのあたりは聞き取れなかったけれど、言いたいことは理解した。

「……分かってる。それじゃあ手遅れにならないうちに行こうか。」

裏山に。」

ハイリツが全然分かってないよと呟くけれど、そんなものは無視。そのかわりにシエールの質問を聞く。

「なんでですか？あそこ危険なんじゃ……」

「野犬がたくさんいるの。だから立ち入り禁止。でもね、何かを壊すのには最適な場所なの。」

私の予想が外れてなければ……裏山で野犬を壊してるはず……なんだけど。

「ビンゴ……みたいだね……」

「うん……」

裏山は真っ赤に染まっていた。おびただしいほどの鮮血で。

「はあ……本当にもう……」

とりあえず進んでいく。ぴちゃぴちゃと音がする。ぴちぴちちちやっぴちやっぴらんらんらん　なんて気分ではないけどまさにそんな

な感じだ。

「うわ……血の海だねこれ。」

そしてその血の海を中心に漆黒の存在はいた。

壊れていた破壊者（後書き）

ハイリツが言った言葉は後々分かる予定。エリオスは過去は克服しています（ほぼ）自分の本能と恐怖には逆らえませぬ。当たり前ですが。後、ハイリツが恐れられているのは力が云々とか言うよりは精神が一番歪んでいるからでしょう。それにエリオスは壊すだけです。ハイリツは拷問しますからね。それも嬉々とした顔で。それが恐怖だったのでしょうか。いや、そりゃ誰だって恐怖だよ。うん。エリオス、君は正常だ。

一番の被害者だった奴隷（前書き）

長めです。ちよいとグロい……ですかね？

一番の被害者だった奴隷

「エリオス、何やってんの。」

「破壊活動。」

「来るなどは言わなかったから来たの。」

「……出ていけ。」

「無理。野犬がかわいそうだからその破壊活動をやめなさい。」

「さつき言っただろ。今大変なんだよ。体内で欲求やら衝動やらが荒れ狂ってる。野犬を壊してもまったく収まる気配なし。むしろどんどん荒れていく一方。今ならこいつら全員殺す危険性がものすごく高い。今すぐ出ていけ。死ぬぞ。」

それはそれは……理由はシエールの影響とストレスだよな。多分。

「今は抑え込んでるんだ？」

「一応な。でも、お前らが来たことによって抑え切れなくなってきた。人間が来たからだろうけど。」

「はあ……なんで抑え込むのかなあ？」

「は？」

「いや、だつてそれなら今ここで私を壊せばいいでしょ？ここなら生徒も先生もないしね。だれにも見つからない。私を壊すのは確かものすごい快感だったよね？なら壊せばいい。誰でもわかる簡単な理論。どうせ奴隷だしさ。私。」

「ちよつ……ルーチエさん！死にますよ！」

「エリオスに殺されるなら本望かな。ま、この世に未練とかないし。それにこのまま放つておいても野犬がかわいそうなだけだしさ。」
「まあ我ながら今回はちよつとヤバいかなって感じだけど。普段なら死ぬほど壊されないんだけどね……」

「ルーチエ。とりあえずそれ以上言葉を発するな。今の台詞でどれだけヤバいことになってると思ってる。」

「抑え込まなきゃいいの。そのまま衝動に任せればいいの。そうす

れば救われるよ。」

とりあえず野犬が。

「おい！」

「もう……エリオスが刺した程度じゃ死なないって。」

嘘です。普通に死にます。というか壊れます。

「大丈夫。ほら、ここにナイフもあるから。」

昨日研いだばかりのが。

「これで刺せばいい。刺して、抉って……ね？絶対に気持ちいいよ？」

ああ……ヤバい。こんなこと言わなきゃよかったかも。まったく……

……私はなんて馬鹿で愚かなんだろう。こんな奴の奴隷になんてなるんじゃなかった。こんな奴に、すべてを捧げるんじゃなかった。こんな奴を信頼するんじゃなかった……心を許すんじゃなかった。

「死なないから。絶対、死なないから。だから、壊しなさい。」

私はマゾじゃなかったはずなのにな。むしろサドなのに。

「ただ……約束が一つあるんだけど……えーとですね……これで薬の貸しは返したってことに。あと他の人壊したりしないでね。」

「絶対の安全ってそれだったの……それじゃ意味がないじゃない。

ルーチエ。あんた死ぬわよ？本当に……死んじゃうわよ。」

「大丈夫だってば。死なないから。人間絶対の自信があればなんとかなる！」

はず。よし。決めた。後でシエルを殴ろう。こうなったのは全部あの純粹すぎる馬鹿のせいだ。すごいですねなんて言わなきゃよかったのに。まあそれ以前に会ってからずっとエリオスは影響を受けていただろうけど。自分と全く逆の存在に。純粹すぎるソレに。悪意の欠片も持っていないソレに。

「さ、楽になりたいでしょ？救われたいでしょ？それなら完全に堕ちたらしいの。」

ゆっくりと私の持っていたナイフがエリオスの手に渡って……グサツと、グチャリと音がした。痛いです。まさか最初から抉られると

は思わなかったよ！

「もうやめてください！」

痛い……痛い痛い痛い。それ以外の言葉は浮かばない。

「やめてください！」

痛い。でも本当に痛いのは壊してる本人だってことは知ってる。だから痛いなんて言わない。心配してるのがシエルだけだったのが悲しい。何度も刺される。でも痛みには屈さない。そんなことしたら私もエリオスも傷つく。それでは先ほどまでのすべてが水の泡だ。叫ばない。泣かない。屈さない

そして、十分後。

「……ごめん。」

「いって。けしかけたのは私だから。」

「でも！」

「まあシエル。あんたとりあえず謝りなさい。」

治癒によって復活した私がいた。

一番の被害者だった奴隷（後書き）

エリオスが本当に壊れたら、こんなもんじゃすみません。だいたい奴の武器は大鎌ですしね。ちなみに本当に壊れるには色々手順を踏むか、理性が完全に飛んでしまうくらいの感情に支配されるか、まあもう一つあるのですがそれはおいおい……その三つのうちのどれかが起こらなければなりません。一番頻度が高いのは三番目だったり。

ルーチエは本当はエリオスのことを信頼してよかったと思っています……よね？うん、思ってますよ。多分……

純粹すぎた黒魔楽師（前書き）

長め？

純粹すぎた黒魔楽師

「なんで僕？」

「あんたの一言のせいでこんなことになったのよ。」

「どの一言ですか。」

それすら分かってないのかこいつ！

「すごいですね。なんて言うから罪悪感やら自責やらなんやらでこんなことになったのよ！エリオスはすごいけどすごくないの！」

「というか本人の前でそれは禁句です。さつきみたいになるから。ストレスがたまつてなければいいんだけど……」

「えーと……すみません。」

「もう慣れるしかないんだけどさ……はあ……」

「死ななくてよかった……本当に死んだら……ほら、葬式代が必要だから……」

「お兄ちゃん？何を言ってるのかなあ？」

「僕は君の兄じゃない！従兄だ！」

四年一緒に住んでたんだからいいと思うんだけどな……

「本当に……ごめん。」

「仕方ないことだよ。人が食べ物を求めるのと一緒にでしょ。」

「なんでもするから。」

「さっきの約束守ってくればそれでいいよ。別に。何してほしいわけでもないし。」

どっちかという心配しなかった友人及び従兄妹たちのほうに怒ってるし。

「いや。だって、大丈夫そうに見えたし。いつものことだしさ。」

「エリオス。とりあえずあの怖がりの人たちと縁切ろうよ。」

「お前が切りたいなら切るけど。」

「だめだ。いまのこいつに冗談は通じない。やりにくいなあ……」

いですよ!?

「ま、ルーチエは私たちとエリオスを助けようとしただけだよね。」
「リン……」

いい子だ。この子……ものすごくいい子だ……ただ、なんだろう、貸し一ね?みたいなオーラが見えるよ?気のせいかな?

「ねえねえ……冗談は置いてさ、この人たち誰?」

今質問されるとものすごく困る! 奴隷だって言ったら余計にあらぬ噂が!

「まあ君らの先輩だよ。ここの卒業生。」

「そうなんですか。」

ハイリツ……ナイス。とりあえず嘘は言っていない。隠し事は多いけどそれは今更だし。

「ルーチエ。片付け終わったけど……この後どうするんだ?」

「どうしようか……」

困ったな……私としては帰りたいんだけどな。でも早退って言われてないし……(そもそも先生たちが気絶してるし。)

「ミルクィ探すぞ。」

「ミルクィ先生ですか?あの人気絶してるんじゃない……」

「あいつはその……吸血鬼だよ……」

吸血鬼の部分を小さな声で言う。なるほど……そうだったのか……その割にドジすぎるけど。

「ん〜じゃあ探しましょうか。」

面倒だけど。

「あつ……いた……よかつたあ……探したんですよ?」
探す前に現れた。今日の星座占い、六位くらいかな?

「あ、ミルクィ先生。ええと……薬なんですね。そう。」

苦労して手に入れた……というか貸しを返した。

「ああ……はい。」

エリオスから薬をもらう。カプセル状。水もセットで渡される。

「どうぞ。あ、毒薬じゃないです。二日酔いによく効くお薬です。」

「あ、ありがとうございます。」

といてごくりと飲むミルクィ先生。一挙一動が可愛いなあ……ふう。癒しって大切。

「さてと……とりあえず外に出ましょ。ここにいってもどっしりおんも
ないしね。」

アイリアの案はすぐに可決されたのだった。

純粹すぎた黒魔楽師（後書き）

喘息つて大変だと思い知らされた（というか思い出した）数日間。皆様お体にはお気を付けください。いや、本当に。

うーん……書くことないなあ。前回の後始末みたいなものですしね。よし、次回予告だ！といつても予告するものないし。よし、ちよつとルーチェの「秘密」の話でも。ちよつとネタバレを含みます。ご注意ください。

色々秘密はありますが、とりあえず彼女は大貴族の娘でした。今は諸事情により平民のふりをしているだけです。

それと、彼女の一番の「秘密」は恐らく彼女が実は彼女でないこと。言葉遊びのようで事実なのです。前回だか前々回だかそれよりうんと前だかのハイリツのセリフにも関係してます。まあもうすぐ明らかになるのでしばしお待ちくださいませ。そしてその事実が明らかになれば小話が思う存分書ける……！

世界の王と名乗っていた黒幕の黒幕

アイリアの案を可決した私たちは外に出る。クラスメート＋先生方々には音楽室へ戻ってもらおう。

「ふう……………」

「で、これからどうするの？私としてはお家に帰って寝たいんだよね。」

「あ……………うん。私も寝たいよ……………」

「ていうかなんでこんなにくさんの妖怪がいるんですか？」

「ん……………まあ簡単に言うと魔術師が妖怪を操ってこの世界を支配しようとしてるのかな？」

なるほど。そうなのか。

「その裏に黒幕がいたりいなかったり……………いたりするんだよ。いるんだ。黒幕。」

「実行犯、妖怪。黒幕、魔術師。黒幕の黒幕、誰か。って感じだね。僕と妹もその誰かを探してるんだけど……………見つからないんだなこれが。分かっているのは世界の王って名乗っていることぐらいだね。」なるほどね。なんていうか……………面倒だな。というか世界の王ってなんだよ。

「あれ？ハイリツさんも魔術師なんですよね？なのにこっち側なんですか？」

「まあね……………僕は僕自身にしかプライドを持っていないんだ。魔術師であることにはプライドはない。僕は僕だからね。僕以外には縛られる気がないんだよ。まあアイリアになら縛られてもいいかなでも魔術師というものに縛られる気はない。」

さすがだと思う。強いと思う。自分自身が堕ちきっていると分かっている私とは違う。というかまあ実際のところ『家』の違いなんだろうけど。

「すごいですね……………自分自身に自信があるんですね。」

「うまいこと言ったね。」

「なんか微妙だけどね。まあハイリツにはすごいって言っても大丈夫だしいいけどさ。」

「エリオスさ〜……分かってないの？黒幕の黒幕。」

「分かってたら壊してる。世界の王つてことは『世界』が関わってるんだろうけどな。呼ぶべきかなあ……あいつ……」

『世界』……この世の中の全てを定義するもの。エリオスなら呼び出せる……んだけど……」

「面倒だし問題がありすぎるからやめとこつよ……」

「エリオスと仲が悪すぎるんですねこれが。」

「だよなあ……あいつ呼びたくないんだよなあ……」

「呼ばないでください。喧嘩するのは見えてるから。」

「で、これからどうするの？」

「……よし。『世界』を呼ぼう」

「なんで！ねえ！」

「でもな〜……」

「やめようよ……私が調べてあげるから。ね？」

「マジで？調べてくれる？」

「うん。」

目の前で喧嘩は見たくない。

「ルーチエはいい子だなあ……」

「……いい子じゃないけどね……」

私は全然いい子じゃない。私は罪人。罪を背負って生きているモノ。

そののどこがいい子なの？

「俺に対してのみいい子だなあ……」

「それは……正解かも。」

「というか大正解だった。それは正しい。」

「で……くどいようだけどこれからどうするの？」

「ていうか僕ら帰っちゃだめ？」

「帰っていいけど……後に後悔しても知らないぞ。」

「冗談に決まってるじゃないか。友人を裏切ったりするわけないだ
ろ？」

エリオスと付き合っていると世渡り上手になるよな……

世界の王と名乗っていた黒幕の黒幕（後書き）

『世界』を呼び出せるのはエリオスだけですが、エリオスが『世界』を呼び出す力を信頼している人間に貸すことはできません。ただし一定の力を持っていないかもしれませんが。ハイリツやルーチエはまったく問題なく借りれます。

嫌いだった友人（前書き）

更新が遅れてすみません……長めです。切れなかったのので。

嫌いだった友人

「でも本当にどうするんだエリオス？」

「うーん……情報がないと困るんだよな……攻めるに攻められない。」

『カツシャアアアン！』

結界が破れた音……だと思っ。おそらく音楽室の……

「やることは決まった。音楽室へ行こう。」

「皆さんを助けにですね！」

「いや、暇つぶし。」（まさかの全員でのコーラス）

本当に……ここにいる奴らは人として最悪だった。いや、私が言えたことじゃないけども。

「あーあー……ちやちい結界。こんなだから破られんだよ。ルーチエ、お前こんな担任とつと壊せ。俺が許すから。」

「いや、そう言われてもね……一応私なんかよりずっと弱い結界しか作れない役立たずだけど一応、い・ち・お・う先生なんだもん。」

「なんでこんなんが教員になれるんだろうね。僕にはさっぱりわからない。」

「ハイリツ……だめよ。そんなこと言っちゃ。ま、まあハイリツが言いたいつて言うなら別にいいんだけど……事実だし……」

「どのみち無能だろうが担任なんていなくてもいっしょだよ。僕の従妹は生きていけるんだから。ルリア姉様やらエリオスやらの教育

……つーか調教のおかげで。」

「ルリア姉さまもエリオスもすごかったりすごくなかったり……まあそこのおねーさんよりは断然すごいもんね。」

「イーリン先生は大事な玩具なのよ？一応いてくれなくちゃ。ツンデレメイドさんはいいわよね。」

「でもさ、ミルキー先生のほうが断然似合うよね、メイド服。」

「お前ら……いい加減にしないと無能……間違えた……えーと……」

「ケルシャも正直だね。」

「皆さん、イーリン先生が可哀想すぎます。」

「あ、すみません。無能……じゃなかつた有能な先生。」

「あ、猫かぶるの忘れてた。あまりにストレス溜まっててついですみません。」

「もうやだ……先生辞めてどつか遠いところに行く……」

「あーあー……かわいそうに。まあ本音だけど。普段言わないだけでエリオスの教育（調教）のほうがよくばど役に立つし。」

「あ、あなたがた少しは私を気にかけてようとは思いませんか!?」

「え？ああ……あなたが……このあほらしすぎる結界を破った……」
そこにいたのは、金髪碧眼の私たちと同じ年くらいの女の子だった。にしてもどっかで見えた顔だな。

「……ガンマさんだっけ？本名はアージェリア「ミツケル」マステイクア。ミツケル家の一人娘。男爵令嬢様。」

「あら、あなたは……リイン「ティア」ありませんか。」

「その名前で呼ばないでほしいな。今はファインスだし。」

リインのお友達……というか知り合いっぽいな。で、その名前を聞いて思い出した。

「アージェリアね……あんま聞きたくない名前だね。昔いろいろあったし。」

「……ルーチェ「ネイレスト」アルファデンテ……あなたまで……」

「その名前で呼ばないでね。今はノクフォルトだから。」

アージェリア……私の上っ面だけの友人だったモノ。大貴族だった私に媚び、裏で陰口を叩いていた一人。

「はあ……エリオス、ごめんね。ま、おあいこってことでさ……許してくれると嬉しい。」

「好きにやっついていいぞ。俺が許す。」

「うん、ありがと。さてと……」

ご主人様のお許しも出たので派手に遊びますか。

ゆっくりと「自分」を取り戻していく。ただし孤独の姫を起こさ

ないように。これくらいなら姫がおきる必要はない。私一人で遊べる。

「アージェリア。久し振り、元気だったかしら？」

「あ、あら……変わったのかと思ったのですけれど……あんまり変わってないみたいですわね。」

「当たり前ではないですか。この私が変わるわけがないでしょう？ありえないほどに……四年前からまったく変わってない。いつだって心は変化しないまま。四年前のあの日、私の心は完全に成長を止め、凍結した。」

「あなたのほうもお変わりないようですね……相変わらず私よりずっと下。安心しましたわ。あなたごときに負けたらクス同然ということですよ。」

「はあ……本当に安心しました。まあそこまで落ちぶれたとは思ってませんでしたけれど……こういうのはやはり本人に会って確かめるべきでしょう？」

「駆け落ちしたようなあなたよりはずっと私のほうがましだと思いますけど。」

「あら……夢があつていいでしょう？」

「駆け落ちってどういうことですか？」

邪魔しないでほしい。破壊という楽しい遊びを。

「あら？あなたは知らないのかしら？彼女は駆け落ちしたんですのよ。」

まあそういう名目で家を飛び出たのは本当。

「アージェリア、駆け落ちしたからって私の本質が下がることはありませんのよ？そんなことも分からないのかしら？やはりただのクズね。それ以下かしら？宇宙の塵以下とも言っておきましようか？ああ、因数分解はできるようになったかしら？」

「ば、馬鹿にしないでちょうだい！」

まあ六歳でできた私が異常なだけだね……因数分解。

「そう。それはよかったわ。まあそれでもあなたはやはり大したことがないわね。あなたみたいな馬鹿な友達がいるというだけで私の価値は下がるわ。どうしてくれるのかしら。」

「黙りなさいっっ!!!!!!!!!!」

「あらあら……もう、ほんの冗談じゃない。また仲良くしましょうね? 楽しく遊びましょう?」

一気に彼女の顔は青ざめる。昔何があったかがものすごく分かる光景。そういや昔遊び半分で壊してたんだよねえ。そろそろフィニッシュかな?

「大丈夫よ? 昔はちよつと甘いところもあつたけど……今はもつと楽しく遊べるようになったの。そう、とつてもとつても愉しく……ね。」

「いや……ごめんなさい……ごめ……」

「あら? 何を謝ってるの? 楽しく遊ぶだけよ? そんなに怯えることはないわ。何もね。」

「いやあああああ……!!!!!!!!!!」

「あ……」

失神しちゃいました。

「やりすぎたかなあ?」

猫をかぶりなおし、皆の知るルーチェに戻る。ふう、たいした暇つぶしにもならなかったな。

嫌いだった友人（後書き）

まだ本来のルーチエではありません。本来はもっとひどいです。話す価値すらないとか言っちゃいます。多分。

恐ろしかった彼氏と彼女(前書き)

有言実行。ちゃんと更新できましたよ！

恐ろしかった彼氏と彼女

「はあ……脅したつもりはないのにな……」

「いや、あれは脅しだ。」

「またやつちやった。」

「お前にしては珍しいくらい遊んでたな。」

「ですよ……はい。分かっていますよ。ちょっとキレてましたよ。はしゃいじゃいましたよ。」

「ラインも恨みあつたんでしょ？ごめんね。先に楽しんじゃって……」

「いいよ……ザマアミロだね。」

この子もやっぱリイツちゃってる。ま、私ほどじゃないからいいけどさ。

「で、この子は多分世界の王とか名乗ってる野郎の手下っぽいからね。情報を得られると思うよ。」

「だろうな……その前にこいつ、魔術師なんだろ？魔力奪っとくか。」

「僕がやるんだよね？」

「当たり前だろ？」

魔術師はハイリツしかいないし、これは仕方がないだろう。

「はあ……まあ仕方ないか……アイリア？なんで君は僕の手を放してくれないのかな？」

「ええ……ええと……なぜか手が離れないのよ。」

「本音は？」

「私以外の女を触っちゃだめでしょう？身内ですらないのに。」

この人もイツちゃってた。うん。独占欲が強すぎるよ……昔は無邪気だったらしいけどその言葉を信用できないよ。

「いや、でもね？魔力を本人から引き離すのは僕しかできないだろうし、あとその人に触れなきゃだめなんだけど……」

「うん。知ってる。」

「いや、じゃあ仕方ないことだと思っただけであきらめてくれると嬉しいな。」

「じゃあ……離すけど……そのあと多分……死んじゃうと思うな……私……とハイリツ……とそこにいる女。」

「ごめん。エリオス。僕無理。」

諦め早っ！

「なあ、すごい例えがあれで悪いんだが魔法の杖やら箒やらあるだろう？」

「……ああ、魔術触媒のこと？まあ杖とかじゃなくてもいいんだけどね。それがどうかした？」

「それ使えばお前が触れることなく魔力を本人からひきはなせるんじゃないか？」

「素晴らしい考えだよ！というわけでそれならいいよね？アイリア。」

まあ、普通に考えたらそれでいいだろう。でもここにいるのは普通とはかけ離れた人たちだ。

「ええ。それなら腕を折るだけですむからいいわよ。」
「やっぱり……そうなると思った。」

「えーと……とりあえず何を魔術触媒にするつもり？」
「悪いな。これしかない。」

そういつてエリオスの力によって、家から天井付近へ瞬間移動をして来て、ゆっくりと落下してきたものは……

「スタンガン……君らしいね……」
「悪いな。とっさに思い浮かんだのがこれだったんだ。電気椅子のほう良かったか？」

「……いや、こっこのほうがいいよ。うん。電気椅子嫌いだし。処刑用具だからさ。あれ。まああれで精神的にいたぶるっていうのもありなんだけどね……」

とっさに思い浮かんだのがスタンガン（と電気椅子）って……まあ

分からんでもないけどさあ……後拷問狂、恍惚の瞳で電気椅子の使い道を語るな。

「で、これに魔術を施せばいいわけだ。」

そう言つて拷問狂……もといハイリツがスタンガンを手につつと、スタンガンは淡く光り出す。

「はい。これをその子にあててスイッチ入れてバチツとすればいいんだよ。」

「だつてさ、よろしくルーチエ。」

なんで私……まあくるかなーとは思っていたよ？ 奴隷だしさ。だけどさ……ねえ？ まあ文句くらいは言つてもいいよね。

「はあ……結局雑用が回ってくるんだね……」

「だつてお前俺の奴隷じゃないか。」

はいはいそーですネ。

「ご主人様のためにしっかりと働かせていただきますよ……」
「……」

スタンガンをアージエリアの首筋にあてて、スイッチを入れる。無論電力は最小にしてある。それでもさすがエリオスの物だけあってかなりのものだ。バチツつと音がしてアージエリアの体からゆっくりと青い球のようなものが出てくる。光を発しながらふわふわと浮いている……これが魔力？

「で？これをどうすんの？」

恐ろしかった彼氏と彼女（後書き）

魔術触媒……いわゆる魔法の杖とか箒とかそういうやつです。魔力を増幅するのに使います。ハイリツ曰く使い道なしだそうです。最強の魔術師にそんなものあっても無駄だとか。

答えづらかった質問

「撃てばいいよ。もしくは刺す。」

「じゃあ私がやるね……よししょっと。」

ラインがエリオスのスタンガンの時のように大きな銃を家から瞬間移動させる。やたらでかいなこの銃。ラインより大きいかもしれない。

「よおっし……いつくよお……」

ダダダダダダ……

「機関銃ですか……ラインさんうまいですね。」

「うん。昔から得意だよ。銃火器の扱い。」

「ていうかりん。あんた私が結界張ってなかったら、音楽室に穴が開くところじゃないの。」

ミリエナが魔力のちょうど向こう側に結界を張っていたらしい。まあ危ないもんね。

「ごめんね。で、魔力は？どこ行ったの？」

「ん？ああ……自然に還った。魔力っていうのはもとは自然のものだからね。」

「そうなの……初めて知ったわ……さてと。」

バキという音がした……どうやらアイリアが律儀に腕を折ったらしい。

「何やってるんだ君は……!!」

「腕を折るって言ったでしょ？」

「いや、そうだけど！あーもう……治すからそこに座りなさい！あ、ここの席の人、誰か知らないけどちょっと貸してね？」

まあ誰がどの席っていうのは決まってるないけどね。

「はあ……何でこんなことするかなあ……」

「結構幸せよ？」

「君は精神科に行くべきだね。」

「そういう意味じゃないんだけど……まあそういうことにしておいてあげる。」

そりゃ幸せだろうね。だって、腕を折ったことでハイリツを独占できるなら腕の一本や二本……どうでもいいだろう。

「なにその含みのある言い方。」

「もう一本折ってもいいかも。」

「やめてね。それ、僕が困るから。」

「ふーん……ハイリツが困るんだ……よしっもう一本！」

「折っちゃだめからね！」

「はい……」

まあそう何本も折ってたら最終的に見捨てられるだろうしね。ハイリツなら見捨てない気もするけど。うん、絶対見捨てないわこいつ。そういうやつだし。でもまあ素直に聞いておくのが一番だよな。

「はい、終わり。」

「ありがとう。おかげで今日一日幸せだわ。」

「だからなんで……」

なんでハイリツは分からないんだろう……そっちのほう疑問だよ。

「えーと……ルーチエ？いろいろ聞きたいことがあるんだけどな。」

「……今さら隠しても無駄だよな……どーぞ質問してください。答えられる限りのことは答えるよ。」

「ええとねー……うーん……よしっ。一番答えやすそうなこと。そのエリオスさんだっけ？との関係。」

「一番答えづらいよ……」

アルファデンテのほうが言いやすかったのに。

答えづらかった質問（後書き）

ハイリツは分かっています。こいつは嘘つきというスキルも持ってます。スキルなのかこれ？まあいいでしょう。ともかくにも人を騙すのが得意です。本人曰く世界で五指に入るほどのものらしいです。そのあたりはいずれ書けるはず。こいつら………というかこいつの過去は非常に面倒なので独立した物語にしようかと画策中。

次の更新はイブもしくはクリスマス当日です。小話を書きます。

小話 平和だったクリスマスイブ（前書き）

クリスマス小話です。そしてPV10000アクセス記念小話です。
これからも皆様どうぞよろしくお願いします。

小話 平和だったクリスマスイブ

「で、どーして君らはここにいるのかなあ……?」

私は友人三人とエリオスとともにアイリアの喫茶店にいる。ちなみに現在午前六時。もちろん喫茶店は開いていない。

「なんでってクリスマスを過ごすために決まってるだろ?」

「……僕とアイリアがつきあってることはご存じ?」

「無論。」

「そっか……邪魔すんと言いたいんだけど。」

ハイリツがキレかけ寸前だ。エリオスにどうにかしてもらおう。

「どうせ店開けるんだろ?じゃあいいじゃないか。夜もここで食うこと決定だし。」

「いつ決定したよそれ。」

「毎年そうだろ。」

「いいじゃない。大勢のほう楽しいんだし。」

「……そうだね。」

あ、ハイリツが負けた。

「僕も忙しいしいんだよ。いいんだけどさあ、なーんか納得いかないんだけど。」

「ハイリツさん忙しいんですか?」

「うん。忙しい。薬を販売するのに。」

ハイリツ「エイジーン。本業、薬剤師。」

「クリスマスにも薬を必要とする人がいるんですか?」

「うん。クリスマスに独りで寂しい男たちがね。欲しがるんだよ。」

「……?何をです?」

ああ、やっぱりシエルはいい子だなあ。

「簡単に言っと人を思い通りにできる薬。それ使って女の子と遊ぼうってこと。ま、信用のおける人にしか売らないけどね。」

ハイリツ「エイジーン。本業、薬剤師。ただし扱う薬は大抵アブナ

イモノ。

「まったく世の男どもは……」

ミリエナが溜息をついている隣でシェールが口をパクパクさせている。金魚みたいだ。

「まああんまり褒められた行為ではないね。」

ハイリツが薬売らなきやいだけだと思っただけだな。

「それとか後はいわゆる媚薬。」

「クリスマスつてのは聖なる夜だぞおい。」

「んー……この頃それも微妙になってきてるからね。」

「まあそんなもんだよね。」

少なくともこの国では騒ぐためにあると思う。

「というわけで僕も忙しいんだよ。まあ配達は猫に任せるんだけどさ。」

「猫？」

「うん。手伝ってもらった。報酬はにぼし。報酬なしっていうのはわるいから。」

意外とハイリツは動物思いだったりする。動物は人間みたいに面倒じゃないからというのが理由らしい。

「なんなら君も手伝う？」

「へ？」

「ここにずっといるのも退屈だろ？ミリエナと二人で配達してきたら？アルバイト代なら払うし。」

「え、いいんですか？」

「うん。で、外で遊んできなよ。」

「そうね……じゃあ言葉に甘えて。」

「うん。これがリストで、薬。鞆に入れておくね。それから……これ着て配達してきてね。」

ハイリツが二人に渡したものは、サンタ服。ただしミニスカ版。ちなみに帽子付き。

「うえ？」

「部屋で着替えてくるわ。行ってきます。」

「うん。行ってらっしゃい。」

笑顔で送り出す私たち。シエルが何か叫んでるけど気にしない。

「リインはいいの？」

「私はちよつと顔出ただけだもん。今日はケルシャと遊びに行くんだ。」

「そう、楽しんでくるんだよ？」

「うん。」

リインも出て行った。

「邪魔者をつまぐ撒いたな。」

「君らはもう諦めてるからいいや。」

「そりゃよかった。薬作りなら手伝うぞ。」

「夜に頼むよ。」

「アイリア、下ごしらえ手伝おつか？」

「ええお願いするわね。」

私たちが下ごしらえを終えたころ、開店時間になる。クリスマスイブ一番目のお客様が入る。

「いらっしやいませ。」

これが私たちのクリスマスイブ。

小話 平和だったクリスマスイブ（後書き）

さて、彼らのクリスマスがこんな平和なわけがありません。明日、色々と書く気満々です。薬剤師さんのクリスマスとか。つきあつてくださると幸いです。

小話 裏世界の日常だったクリスマス（前書き）

すみません！26日になってしまいました……本当に申し訳ありませんでした（泣）

裏世界の色々が分かるお話です。

12/31 タイトル編集。暁と混ぜてました……すみません。

小話 裏世界の日常だったクリスマス

「で？俺は何すりゃいいわけ。」

「んー……とりあえず今は何もしなくていいよ。そこに座っというて。」

「薬瓶やら試験管やらが山ほどある部屋。向こうのほうでは大鍋が妙な煙を発していた。」

「お前もよくやるよ。こんな仕事。」

「好きだからね。薬作るの。」

「君とは違つてと笑う友人。本当に昔から容赦がない。確かに俺が治癒師になつたのは治癒したいからではなく、姉さんの夢だったからだ。薬作りが好きで薬剤師になつたこいつとは全く違う。」

「で、この小さいテーブルやら椅子やらはなんだ？」

「俺たちの座っているテーブルの上にはとても小さなテーブルとイスがある。その上にはティーカップ。小人用みたいな。」

「うん？すぐ分かるよ……ほら。」

「ドアが叩かれ、ハイリツが開けると小さな小人たちがわんさか入ってきた。五十人ほどか？皆赤い服に赤い帽子、白い袋をしょっている。これは……」

「サンタか。」

「そ、皆に平等にプレゼントを配るサンタさんだよ。毎年これくらいの時間にお茶しに来る。彼らにも休憩が必要だからね。」

「なるほど。確かにそれもそうだ。彼らは椅子に腰かけ、袋を置く。」

「はい、紅茶。ミルクと砂糖はご自由に。」

「# +」

「キイキイと甲高い声が響く。しかも皆口々に喋るもんだから何を言ってるかさっぱり分からない。」

「コーヒーは入れないって毎年言ってるだろ。嫌いなんだよあれ。それからソイミルクなんてものはない。薬はいつも通り入ってるん

だから文句言うなよ。」

どうやらこいつは聞き分けたらしい。

「薬ってなんだ？」

「疲れをとるためのやつ。」

ああ、なるほど。至れり尽くせりだなおい。本当、罪のないものは甘い奴。

「おい、客だぞ。」

ノックの音がする。頬杖をついてサンタを見ているハイリツに伝える。

「はいはい。どうぞ。」

「おー……これはこれは可愛い先客だ。」

「ああ、アラウエル侯爵。今年も独り？」

「ああ。悲しいことに。」

入ってきたのは二十代後半の若い男。

「いいじゃない。貴族でしょ？どうせすぐ見合いだ。」

「見合い相手でいいのがないからここに来ているんだ。いつもと一緒にいい。」

「はいはい。で、どれにする？」

ハイリツが奥の扉を開けるとそこにいたのは数名の男女。メイドもいればいいところの女もいる。共通点は全員手足を縛られていて、口を封じられているところ。

「どれでも。」

「……じゃあこの子でいい？」

「ああ。どこの子だ？」

「シアラドル伯爵家のメイド。」

「ああ、あそこか……執事がお嬢様で好き放題遊んでる。」

「そ、あそこ。ていうかその元凶僕だけだ。この子はい昨日アロウ君がくれたんだ。お嬢様連れて。」

「なるほど。いくらだ？」

「うーん……三百でいいよ。」

「安いな。」

全くだ。安い。破格の値段だ。

「まあお得意様だし。」

そう言いながら、メイドの女に注射をして、男に渡す。

「ありがとう。はい。三百万。」

「ありがとうございます。来年もここに来なよ。」

「……それは避けたい事態だな。」

そう言つて、男は出て行つた。

「お前、いいのか？ やつてることは人売りと一緒にだぞ。」

「いいのいいの。人売りよかましだし。それに彼らは売られても仕方のないような人ばかりだ。さっきの子はまあまだましだからいいとこに渡したし。問題なし。」

顔色一つ変えない男。なんで俺こいつと友達なんだろう。

「ま、これを異常と認識しているうちは君はまだ大丈夫だよ。」

そうかよ。裏世界の寵児。

「そりゃあよかった。」

本当、こんな奴と友人になるんじゃないやなかった。あと手伝つとか言うんじゃないやなかった。

これが俺のクリスマス。

小話 裏世界の日常だったクリスマス（後書き）

その後サンタたちは仕事に戻り、25日の朝、ここへ戻ってきてお酒を飲みましたとさ。こいつらしか癒し要素ないですね、この話は

……

あと、裏世界の寵児と言われている理由は本編で明かします。もしくは彼らの過去話で明かします。しばしお待ちくださいませ。

小話 平穩を望んだお正月(前書き)

新年あけましておめでとございませう。拙い物語ですが本年もどうぞよろしくお願いします。> (「」) <

平和な日常。長めです。こころで小話書きつらひ……

小話 平穩を望んだお正月

「……うちは本日営業しておりません。お帰りはあちらになります。」

「んな嫌そうな顔すんなよ。」

私たちはアイリアの喫茶店にいる。ちなみに現在は午前七時。

「大体昨日もここで飲んでたよね。僕ら。お酒飲みまくったよね。」

「午前四時頃まで……つまりつい三時間前まで君ら居座ってたよね？」
それは言わないお約束だよ。

「いやあ……新年のご挨拶をと。」

「今日の0時に聞いた。」

「私はハイリツにお年玉をたかりに来た。」

「正直で結構。はい。お年玉。」

わーい。

「初詣に一緒に行こうぜっていう誘いだ。」

「……僕とアイリアがつきあってることは」

「ご存じだ。」

「……もう好きにしたら。」

「よし。十一時にミリエナのところな。」

「はいはい。」

「今年も大盛況ね。」

「まあ去年も色々あったからね……神に縋りたくもなるんじゃない？」

ミリエナの神社は大きいしね。

「ていうか毎年毎年お前は実家に行かなくていいのか？」

「いいのいいの。今はノクフォルトだし。」

問題なし。

「本当、すごい人だね。シエール、大丈夫？」

「なんとか……」

人波に流されそうな少年一名。ハイリツが救済。

「うっ……背丈が欲しい……」

「……まあ俺らほどは伸びなくてもいいと思うが。」

「百八十突破してるしね。高すぎるのも不便なもんだよ。」

「……羨ましいです。」

まあ頑張れ。シエール。

「ふう、ようやくか。」

私たちはようやく境内についた。かなりの時間を使った気がする。

で、お賽銭投げて、手を打って……おしまい。待ち時間を返してほしくなる。

「いらっしゃい。」

巫女服姿のミリエナが現れる。似合ってるなあ。

「ああ、ミリエナ。毎年思うけど似合ってるよね。」

「ありがとう。あけましておめでとう。今年もよろしくね。」

「こちらこそ。」

「シエールもよろしくね。」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。あの、えっと、綺麗……

……ですね。」

「ありがとう。」

顔を真っ赤にしたシエールは犯罪級の可愛さだけどね。

「若いねえ。」

「全くだ。」

「シエール可愛いわねえ。」

「あっつ……」

何この可愛さー！

「シエール、一緒に回りましょうよ。もう挨拶まわりは済んだし。」

「え、あ、はい。」

「あ、ちょっと待って。ミリエナ、はい。お年玉。三人分。」

「あ、ありがとう……」

パタパタと二人は人波にのまれ紛れていく。

「ふう。可愛いね。」

「お前にはあんな時代なかったよな。」

「それは言わないお約束。」

「水飴でも食べに行きましようか。」

「あ、私も食べたい。」

「この水飴美味しいしね。」

「花より団子ってか。」

「自分で花とか言うなよ。」

「ずんずんと進んでいく女二人を見ながらゆっくりと歩を進める。」

「あーあ。僕も水飴食べよっかな。」

「奢らないぞ。」

「えー……奢って?」

「上目遣いに言うな。気持ち悪い。」

「けらけら笑いながら彼女の髪を結いに行く友人。俺もルーチエの髪を結ってやるか。」

さて、今年はどんな年になるかねえ……

小話 平穩を望んだお正月（後書き）

平穩を望んだのは誰でしょうね？作者にも分かりませんが。まあ猫かぶった人々は皆、平穩を望んでます。平穩で刺激的な生活を。

大貴族だった平民以下（前書き）

更新が遅れてすみません。小話三つで疲れ果てました。後はハイリッ達の過去話書いてました。いつかアップします。気長にお待ちくださいね。

大貴族だった平民以下

「んーと……エリオスは私の同居人で、飼い主で、使い手で……で、ご主人様なわけです。」

「……」
聞いた本人がまさかのスルーだった。

「おーい……リウカさーん……ちよっ……無視ですかー……あの一……悲しいんですけど。」

「うん。まさか同居しているとまでは思わなかったんだよ……」

「あう……これにはそれなりに深い事情があるんだよ……拾ってもらったときは十歳だったし……」

その他諸々色々と事情が。

「でも今なら一人で暮らせるよね？」

「えーと……うー……」

困った。反論が思いつかない。いや、理由はあるんだけどここで言うのはややこしい。

「本当は駆け落ち……」

「みたいな甘いもんじゃないよ。そもそも許嫁だったから駆け落ちなんてしなくてもよかつたし。まあ許嫁だったのを知ったのは四年前拾ってもらったときだけど。」

私の母親であるルリアは六年前からエリオスと知り合いで……まあ色々あったわけだ。

「じゃあなんで一緒に住んでるの？」

「ルリア……こいつの母親に頼まれたんだよ。私が死んだらあの子よろしく可哀想に親がこんなだから愛情を知らない冷たくい子だけどいい子だから……多分気も合うと思うし微妙に似てるしね。親代わりになつたげてね、それにあの弟にあの子を渡すわけにはいかないし、あなたなら何とかできるでしょ？というわけで四六四九でよろしくって。」

「ああ……ごめんなさい。本当にごめんなさい。あんな母親でごめんなさい。」

私の性格は父親似なんです。母親は私と違って常日頃からテンション高かったんです。

「ま、いいけど。あいつの言うことは当たってたわけだし。俺に賭けに勝ったやつは後にも先にもあいつだけだろうよ。」

しかし助かった。これでややこしい説明をしなくて済む。嘘も言っていない。

「んー……ま、いつか。いろいろつつこみどころがあるけど……次つ。アルファデンテってあのアルファデンテ？」

「うん。あの、名ばかりの王族より権力あるかもしれない大貴族のアルファデンテです。その本家の一人娘が私。ま、今はただの平民だけだね。」

「なんで〜もつたいないよっ。」

「いや……まあ叔父に捕まりたくないし、貴族だと結婚しなきゃだし、面倒なことが多いし、他にもややこしいことがたくさんあるんだよね。」

それに……それに……こつちのほうは居心地がいい。

「ふーん……ラインのあれも……」

「ああ……ティリアは今の父親の姓。私の母親、再婚させられて……」

……さ……ファインスは前の父親の姓。」

「ふーん……ややこしいんだね。」

まあラインは昔ごちゃごちゃとあつたみたいだからね。

「で？ほかに聞きたいことは？」

「ああ……ルーチエさん。」

「うん？」

「いつもあんな風に人を壊してるんですか？」

「まさか。たしかにあれが快感であるのは事実だけどさ……てか、あれは壊したうちに入らないよ。アージェリアは昔遊んであげたからあんな風になっちゃったけど。あとは口調が悪かったかな……昔

と同じようにしちゃったから。」

ちよつとだけ悪かったかな？と思わんでもなくもなくもない。

「ま、あんなの大したことないわな。」

「だよな？」

「……もーいーです。」

人生において諦めつて大切だと思う。

「ま、そんなもんかな？あ、そうそう。この人たちが先輩って言うのは本当。ここの卒業生。」

「あ、そうなんだ。」

大貴族だった平民以下（後書き）

平民以下⇨奴隷ですね。

ちなみにルーチエはアージェリアに悪かったかな？なんて思ってますん。確実に思ってますん。

よくなかった教育（前書き）

十六日に更新できなかった……うう。週一更新が目標です。なんか目標が下がった気がします。すみません。

よくなかった教育

「うん。ねえイーリン先生？」

「そうだよな。私なんていらぬよな……今まで気付かなくてごめん。最低だよな。」

「ほら、なに別世界にトリップしちゃってんですか。」

「うー……だって……」

「あんなの冗談の反対の反対の反対じゃないですか。」

「それって本気ってことじゃないか！」

あ、ばれちゃった。まあ反対の数が奇数なら本気、偶数なら冗談なだけで。

「まあまあ……人生諦めが肝心ですよ。」

「ここで諦めたら教師として何かが終わっちゃう気がするんだ。」

「いいじゃないですか。エリオスみたいに人間として何かが終わっちゃってる人だっているんですから。」

「あ、なんかちよつと元気になった。」

「壊されたいんだな？」

「すみません、めっちゃかなしいです。」

やっぱり変わり身が早くなるよなあ……まあイーリン先生は昔エリオスといろいろ……それはそれはいろいろあったわけだしな、気持ち分かる。

「はあ……ルーチエ、お前はとりあえず誰かを蔑んでなきゃ生きていけないんだな？」

「え？壊されんのかってイーリン先生じゃなくて私？」

やだなー……まあ仕方ないのかもしれないけどさ。

「どつちも。」

最悪の答えが返ってきた。ナニコレ？どつちかじゃなかったんですか？ねえ、ゴシユジンサマ？

「いや、だってさ……人格としてエリオスを褒めるなんて正直な私

にはできないよ……人間失格を褒めることは不可能だよ。」

「いいんだよ、人間として失格でも。そもそも人間なんてこの世で下から数えたほうが早いような生物だろ？」

「そういうあなたは悪魔だろうが。人間よりも下だろうが。」

「そうだね。人間として失格でも悪魔としてなら……」

「……そうだな。」

「開き直ったんだね。」

「立ち直ったんだよ。」

「そういうことにしておいてあげよう。私は優しいからね。」

「腹立つな……いっぺん地獄に落ちろ。」

「誰かさんの手を取った時から落ちてるからもう落ちなくていいね。」

「ま、その前から落ちてるんだけどさ……生まれた時からずっと……」

「そもそもこの世自体が地獄なのだから。この世に生まれ落ちた時と」

同時に地獄に落ちた。」

「この頃どんどんルーチエがだめになってる気がするんだよ。」

「リイン、この子はずっとダメな子よ。誰かさんの教育のせい……」

「……もとい調教のせい。」

「なんで、こいつの性格の悪さを俺の教育のせいにするかな……」

絶対ルリアの教育だろ。」

生まれ持ったもの+いろいろな人々の教育+この世界だろうね。」

「まあルリア姉様の教育も結構ヤバかったからな……笑顔でこの世」

は本当に無能だらけねなんて言う人、あの人以外に知らない。」

「ほら、俺の教育じゃないだろ？」

「君も言いそうだね。五分五分じゃない？」

「あんなのと一緒にしないでほしいね。」

「いや、似てると思うけどな。娘の私から見ても。まあ根本的に違う」ということを除けばだけど。」

「そもそもやっつてることが違う。ルリアがやっつたのは教育だろ。」

「ああ、そっか。君がやっつたのは調教だもんね。」

「

」

「……言い方が悪いだろ。」

「でも正しかったり間違ってたり……正しかったり？」

「はいはい、ただしーです。」

あ、諦めた。まあ確かに正しい。けどちょっと補足しとくか。

「母様がやったのは、基礎教育で人として教育したんだよ。エリオスがやったのはその補強、あとは管理。人として教育された記憶はないね。」

物として扱われたことなら山ほどあるけど。

よくなかった教育（後書き）

イーリン先生とエリオスの間での抗争は気が向けば書きます。まあただただエリオスが壊していくだけです。こいつに對抗できるのってルーチェかハイリツかハイリツの姉ぐらいですよ。

人でなかった少女

「当たり前だろ。お前は人じゃないんだから。」

「そーですね。」

「扱いがひどすぎますよ。」

「いいんだよ。俺のものなんだから。どう扱おうが自由だろ?」

「ルーチエさん、いいんですか?」

「ん? まあ、恩もあるし、そんな滅茶苦茶な扱いを受けたこともないし。楽しだねー……それなりに自由だし……別にいいよ? というか問題という問題が見当たらない。」

これは本音。実際にひどい扱いを受けたことなんてないし。(あくまでも私の主観だけ)

「ひどい扱いを受けてることを自覚することが大切だと思うぞ俺は。」

「エリオス、私ってひどい扱い受けてるっけ?」

「いや、全く。」

「だよ。ケルシヤがおかしいんだよね。」

「本人に聞いて受けてるっていう奴がいるか!」

あ、それもそうだ。

「ハイリツ、私ってひどい扱い受けてる?」

「んー……まあ、ひどいっっちゃひどいけど……滅茶苦茶ひどいわけでもないし……問題なし。」

「ほら。」

やっぱりひどい扱いを受けてない。

「……もういい。知らないほうが幸せだしな……」

あ、ケルシヤが悟り始めた。

「やっぱり、諦めつつ肝心なんだね。というわけで、イーリン先生も諦めましょうよ。」

「なんで諦めなきゃならないんだ。」

「いや……」

私たちに口喧嘩で勝てる人は多分いないから。そもそも誰か一人と口喧嘩するならともかく全員敵なら勝てるわけがない。

「先生つてうたれ弱いですよね。意外と。」

「そんなことはない。」

はうつかわいいなあ……意地はつてる先生可愛いなあ……などと言つてるミリエナは置いといて。

「いや、だってあれで落ち込んでる時点で相当……」

「弱くない。」

「なんていうか、エリオスが先生を精神的に破壊してた理由が分かった気がするよ。」

「だろ？」

エリオスは一回イーリン先生を壊したことがあったけど……あの時はひどかった。私が見てもひどかった。これ以上もないくらい壊して壊して壊して……自殺すらさせず……私が助けた時にはイーリン先生はボロボロだった。

「まあ、とりあえずイーリン先生は私から見えていい人ですよ。だから安心してください。」

「ルーチェ……」

人間は下等生物だけ……という言葉は言わないでおこう。

「ルーチェ、心にないことを言うのはよくないぞ。」

「それ言っちゃだめでしょ！」

「やっぱり私は教師失格なんだな……」

再び落ち込むイーリン先生。

「そんなことないです！イーリン先生ほどいい先生を私は他に知りませんから！」

一応フォロー。

「ルーチェ、正直に生きるべきだと俺は思う。」

「うん、今この状況で正直に生きるなんて言うのは無理。」

「つまり、お前がさっき言ったことは嘘だということだな。」

「誘導尋問なんて卑怯だよ！」

「誘導尋問じゃない。」

「じゃあ何？」

「遊び。」

「ひどいよ！その遊びで何人の人が傷ついていると思ってるの！」

まあ、一人だけだけど。

人でなかった少女（後書き）

エリオスが怖いですよ。作者なのに。まあ精神的にぶっ壊れてるのはむしろハイリツのほうなんですけど。怖い、この二人怖い……ちなみに彼らが組んで、裏社会の治安を守っていた時に裏社会にいた人の話。

「もう、俺あいつらに会いたくねえよ。いまだに夢に出てくんだ。生首がよ、飛んでくんだ。他にも悲鳴が山ほど聞こえてきてさ……あの時俺は改心しようと思ったね。おかげで、今はバーのマスターさ。子供もいる。言ってるんだ、客や子供にも、何があってもあっち側に行くなってな……」

笑顔だった破壊者

「だって、お前をからかって遊ぶのすごい楽しいんだもん。」

「やっぱりひどすぎるよその性格。」

「俺をそんな風にするお前が悪いんだよ。」

「絶対おかしいよねえ！その考え！」

「おかしくないって。これが正解。いいだろ？再起不能にしているわけじゃない。」

「いや、イーリン先生が可哀想だよ！私を壊すのはともかく！」

「あ、いいんだ。」

「ヤバイ！このままいくと本気で壊される！」

「えーと……うー……ん……うん、ひどくないならまあいつか。」

「そこでまあいつかってなるのが本当にすごいよね。尊敬するよ。」

「完璧なる上下関係ができてたらもうどうでもよくなるんだよ。」

あとは今さら抗議しても遅いだろうなと……ご主人様だしね。

「あーあ可哀想に。いくら勢いで言っちゃったとはいえ……エリオス、手加減してあげたほうがいいよ？」

「大丈夫だって、本気でやるうなんて思っていないから。少なくとも

ここでは。」

「ちよつと待って。それって家に帰ったら……」

「お前が言ったことだろ？俺に非はないよな？」

「そうなんだよなあ。それが問題。」

「今日はリインの家で泊まることになっててね？」

無論今作った話。

「あつそ。じゃあ明日。」

「今日から一週間。」

「じゃあ一週間後。」

「今日から一年間！」

「あー……じゃあ乗り込みに行こう。」

「そこは一年後じゃないんだ……」
正直だった。ていうか乗り込みって……まあ、全員お互いの家の鍵は持つてるから乗り込むくらい容易いけどさ……
「とりあえず壊していいか？」
「だめって言ったら？」
「約束破りは嫌いだから壊す。」
結局壊すんかい！
「ひどいよ……それ、結局同じでしょ？」
「大丈夫だつて。約束破ったら普段の倍壊すから。」
それは……相当きついかもしれない。まあいつか。少々壊されるくらい……
「つてならないからね！」
「俺はお前が何考えてるかは分かるけど、他の奴らは分かんないからな？」
「あう……勢いあまって……というわけで壊すなんてやめましようよ。」
「やめません。」
めちゃくちゃいい笑顔で言われた。逆に怖いよ。恐怖だよ。
「イーリン先生見逃すなら良かったり良くなかったりーなんて。自分の気持ちに整理がつかずアリスになっちゃった。」
「ほんと、お前はいちいち俺の破壊欲と独占欲をそそるよな……恐ろしい奴。それとも壊されたいのか？」
「天然だよ。純度百二十パーセントだよ。別に壊されたいわけじゃないよ。」
全力で否定。そこまでヤバい性格にはなっていないはずだ。多分。
「天然でそれだったら余計に怖い。ていうか心臓に悪すぎる。」
「じゃあそのまま心臓を壊してあげようか？」
「やれるもんならやってみなつて普通なら言つところだけど無理。言ったら本当に壊される気がする。」
「じゃあ私を壊さないでよ。」

「それとこれとは話が別。」
「いや、全然別じゃないと思う。と、いつか繋がってる……よね？」

笑顔だった破壊者（後書き）

墓穴を掘っていく奴隷。可哀想に。

直らなかつた性分(前書き)

短め?

直らなかつた性分

「あれ？繋がってるよね……うん。」

「繋がってない。」

「繋がってるって！」

「俺が繋がってないって言ってるんだから繋がってない。」

ものすごいなるほどと思ってしまった自分が悲しい。全然理論になつてないのにな。これが奴隷の性ってやつですかね。

「考えてみるよ。俺は契約上お前を好きにできるんだぜ？ってことは、お前が何かする前にそれを止められるんだよ。」

「あ、あれ？でも話は繋がって……あれ？でも繋がってなくて……分かんなくなっちゃった。」

「一応親戚だから言っておいてあげる。話は繋がってるよ……ね、アリス。」

「うん。繋がってたり繋がってなかったり。」「
ややこしくなってきた。ダメだこれ。」

「うう……結局繋がってるのに繋がってなくて……でも繋がってて……」

「ほら、考えすぎるから分からなくなるんだ。というわけで壊していい？」

「いいです？あれ、よくなって……もう分かんないよ……」

「答えを教えてやるよ。」

「本当？」

「俺は嘘はつかない。答えは繋がってない、そしてお前は壊されるべき。」

「あ、そーなんだ。よかった。うん。やっぱり答えが出なきゃね。」「
よかったよかった……じゃあ私は壊されるべきで……ん？」

「壊されたくないのに何でそんなことになってるの？え？あれ？」

「あのねえ……エリオスがこの手のことで嘘をつかないわけがない」

だろ。この男は自分に都合のいい嘘はつく野郎なの。信じちゃダメだろ？」

あ、前提が間違ってたのか。そうだよなあ……私も結構騙されてきて……ってあれ？

「あんま騙されてない気がするんだけど。」

「そりゃそうよ。だってルーチエ、エリオスの言うことすぐに聞いちやうんだもの。騙されてるのに気づいてないのよ。」

なるほど。そうか……でもこればかりはな……

「性分だしなあ……」

奴隷としてちようきよ……もとい教育されてきた身だ。それも四年間も。ご主人様の言うことは絶対。これはもうしみついている。

「うん。お前はそのまま育てばいいんだよ。」

「そっか。そうだよね……うん。」

「だから騙されてるんだってば！」

はっ……また……

「もう騙されてもいいから考えるのやめたい。」

めんどくさいし。直るもんじゃないし。っていうか直す気ないし。

「じゃあ考えなくていい。何も考えずにそのまま身を委ねればいい。楽だろっ？」

それもそうだ。もうそのまま……全部頷いていたら楽な気がする……

…意識が切れかけて

「ルーチエ！」

「あ……あーもうまた……」

「そのままでもよかったのに。ま、それだと面白くないけど。」

なんかものすごく疲れた。このまま寝たらどれほど幸せか。ご主人様、可愛い奴隷は現在眠いです。こここのところ睡眠不足なんです。つてなわけで寝かせてくださいよ……口に出しても無駄だから出さないけど。

直らなかつた性分（後書き）

この話、結構書きためてはいるのですが、久々にこちら辺のシーンを読み返してしみじみと思う、何この普通のイキモノ。現在私の書いているルーチエは覚醒（？）した後なのもつとこつ、辛辣なんですよね。だからこちら辺のルーチエがすごい新鮮です。ああ、純粹だー……普通だー……

小話 初々しかったバレンタイン（前書き）

バレンタインデーのお話。ちょっと長めです。

小話 初々しかったバレンタイン

「ハイリツさん……いないんでしょうか？」

僕、シエルはハイリツさんに会いにアイリアさんの経営している喫茶店に来た……んですが。

「うー……」

店内は真っ暗、ドアにはクローズと札がかかっています。どうしましよう。

「仕方ないですね。諦めて……あれ？」

「にゃー」

可愛い黒猫がやってきました。これは、ハイリツさんがおつかいによく使う猫？

「にゃー」

ついて来いと言わんばかりに猫は歩き始めます。ついて行ってみましょう。

「にゃー」

ここは……喫茶店の前、すなわちルーチェさんたちが住んでいるマンション？

「ハイリツさんってここに住んでましたっけ？」

猫はどんどん進んでいきます。仕方がないので僕も進みます。

「すみません。」

「んあ？」

管理人さんに聞いてみましょう。

「ハイリツさんはこちらに住んでらっしゃいますか？」

「あー？ ハイリツ＝エイジーン？」

「はい。」

「住んでるよ。908号室。」

「あ、ありがとうございます。」

ドアが勝手に開きました。どうやら管理人さんが開けてくれたよう

です。

「ありがとうございます。」

「いや。」

もう一度お礼を言ってエレベーターで最上階の9階まで。

「おーやっぱリシエールだ。」

「あれ？ ハイリツさん？」

エレベーターが開くとその先にはハイリツさん。

「今日は僕徹夜だったんだよね。」

「はあ……」

「薬は喫茶店で作るわけにもいかないでしょ。だからこっちの家で作ってるんだ。」

ああ、なるほど。

「で、廊下に出てみると、にシエール君らしき人がいたからソレ送ってみた。御苦労さまだったね。」

「にゃ〜」

猫はにぼしをもらって満足そうです。

「それで、何か僕に用？」

「え、あ、はい。ちよつと相談したいことが……」

「エリオスも一緒でいい？」

「はい。」

「ならおいで。」

ハイリツさんに連れられて、908号室へ。そこはなにやら散らかつてはいましたが意外と明るい部屋でした。

「薬作りするのに暗かったら不便だろ？ あ、床に散らばってる紙は見ないふりね。論文とか、その他諸々。まあこまめに片づけて入るんだけど、今日は徹夜だったからね。」

ああ、そういうことですか。僕は二階へあがります。そこはどうやらリビングのようで、とても綺麗でした。

「シエール？」

「あ、こんにちは。エリオスさん。」

「はい、紅茶。相談だつてさ。なに？」

「え、ああ、あの……お二人はチョコレートをもらいましたか？」

そう、今日はバレンタインデー。僕もミリエナさんからチョコレートをいただいたんですが……

「え？ ああうん。」

「もらったが。それがどうかしたか？」

「えーっと……ホワイトデー、どうします？」

そう、僕は今まで誰からもチョコレートをもらったことがなかったので、お返しに何をあげたらいいのか分からないんです。

「あー……お前、ミリエナからもらったのか？」

「はい。すごく手が込んで美味しかったんです。で、何を返したらいいのか分からなくて。」

「なるほどね。じゃあ今度一緒に買い物行く？ どうせ僕らも買わなきゃいけないし。」

「いいんですか!？」

「うん。いいよね？」

「ああ。」

よかった。これなら安心ですね。にしてもなんだか二人とも楽しそうです。笑顔ですし……どうかしたのでしょうか？

「ああ、何も無いよ。ちょっと、ね。」

「ああ。何もない。」

ならいいんですけど……

その後の会話

「いやあ、ミリエナ、チョコ、あげたんだね。」

「あげないとか言ってたけどな。」

「いつになったら彼らはくつつくのかなー」

「さあ。シエールが鈍いしな。ま、後数年はかかるだろ。」

「だよなー……賭ける？」

「よし、いくら賭ける？」

「そうだなー……………」

この賭けの結果が分かるのはもう少し先の話。

小話 初々しかったバレンタイン（後書き）

暁とかぶった感がありますが皆様スルーでお願いします。いやあ、たまには初々しいのもいいですよ。この続きはホワイトデーで書こうと思いますー。

世間知らずだった少年

「ま、ここで壊すのはやめておいてやるよ。俺は優しいから。」

「え？本当に？」

これで嘘だったら……ショックだ。

「これは本当。」

これは……ね。

「はあ……まあ騙されていいんだけどさ。面倒だしね。疑ってかかるのも。」

「なら騙され続ける。」

「ごめん。それはそれで嫌だ。」

ていうか騙され続けるって……なんだその命令は。いくら私が従順な奴隷でもそれはちよつと従えないよ。

「嘘で塗り固められた愛もそれなりにいいものだと思うんだ……どう？」

「いやだ！なんかいろいろといやだ！そんな愛、悲しすぎる！」

「大丈夫。騙されてるって気付かないようにするから。」

「全然大丈夫じゃないじゃん！」

でもまあ気付かないだろうなあ……普通に信用しちゃうしなあ……はあ。いつからこんな子になったんだ私。

「安心しろって。そんなことしないよ。だって俺はお前のものだから。」

私はエリオスだけのものだ。それと同時にエリオスは私だけのものでもある。愛情という名の鎖によって互いが互いを雁字搦めに縛り付ける。

「所有者に嘘の愛なんて……捧げられるわけがない。そんな後が怖いことなんてできない。」

「まあ自分の身を引き裂くのとおんなじだよね。」

しかも自ら。自分の手で。ただの自殺行為だ。自傷行為で自虐行為。

「まあそのことは置いて……シエール、どうかした？」

「この世の中には僕の知らない世界が山ほどあるということが分かりました。」

「どうやら、質問することが多すぎて、質問するのをやめたみたいだ。賢明な判断だね。」

「まあね。この世の中は広いからね。」

「それを抜きにしてもシエールは世間知らずっぽいけどね……」

「失礼な！僕は世間知らずなんかじゃありません！」

「……アルファデンは知ってた？」

「めちやくちゃ初歩的な質問。この国でアルファデンを知らない人はおそらくゼロ。」

「知ってたに決まってるじゃないですか！ていうか僕のことめちやくちゃ下に見てるでしょう！」

「じゃあジエーランスは知ってた？」

「これもものすごく初歩的な質問。」

「ルーチエさんは意地悪です……」

「一瞬意識が飛びかけた。かわいすぎだ。なにこの子。そこらの女の子より可愛いつて……ええと、シエールは男の子だね？それであつてるよね？」

「可愛いよお……」

「ほら、ラインもうつとりしてるよ。なんか小動物とか愛でる目だよあれ。」

「腹が立つわね。」

「嫉妬してる奴が約一名。うん、気持ちは分かるよ。」

「で、知らなかったんだ？」

「急にハードルあげちゃです……」

「うん、上げてないから。むしろ下げたかもだから。」

「というかこの世にジエーランスを知らない人がいたなんて……驚き。」

「あうう。」

「なんだろう、めちやくちゃSっ気をそそられるんだけど！」

「シエール、ぜんっぜん世間を知らないんだね。」

「あう。」

「いいんだよおそのまま。かわいいーもん。男の子なのにね。」

「はうううう。」

うん、やっぱりここにいる奴らはさだ。もっというとドさだ。

「そもそも山奥で育った僕が世間知ってたらおかしいじゃないですか！」

「いいわけはいいから。」

「いいわけじゃないです！」

「とりあえず、世間知らずなことこの上ないシエールにジエーランスのことを説明してあげるよ。」

「だってさ。よかったねシエール。あ、そうそう。嘘ついたことは忘れてないからね？」

シエールの顔が青ざめる。まあ普通そうなるよね。

「大丈夫だって。そんなひどいことをするつもりはおそらくないから。」

「今おそらくって言いましたよね！」

「……で、ジエーランスの説明だよね？」

「あ、はい。」

「破壊魔、以上。」

「お前それだけで説明済ます気か。」

「だってそれ以外の確な言葉ってないだろ？」

「なんとなくわかりました。」

「ほら、わかっちゃってるし。」

まあエリオス見てたら分かるよね……だいたいは。

世間知らずだった少年（後書き）

この話のヒロインって誰でしたっけって言いたくなるのは私だけじゃないと信じています。

破壊欲旺盛だった一族（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！
これから何とぞよろしく
お願いします。

ジェーランスの説明です。

破壊欲旺盛だった一族

「お前それだけで説明済ます気か。」

「だってそれ以外の確な言葉ってないだろ？」

「なんとなくわかりました。」

「ほら、わかっちゃってるし。」

まあエリオス見てたら分かるよね、だいたいは。

「まあもうちよつとちゃんと説明すると、貴族の中では中流なんだけど、いろいろあつてときにアルファデンテを超えるくらいの力を持つっちゃったりする貴族だね。全員戦闘能力が異常に高いうえに破壊欲がどの欲求よりも高い一族だよ。まあそこでもエリオスは異常だっただけじゃないけど。暗殺姫伝って知ってる？」

「知りません。」

「本当に世間知らずだね……まあ昔、女好きの王に好かれて王の第百六番目の妃となったお姫様がいて、彼女が王宮で破壊欲に目覚めて二人の騎士従えて王宮を出ていってから多くの破壊をしていく話だね。」

「王様も壊したんですか？」

「いや、彼は壊されてないね。暗殺姫一人出ていってもなんとも思わなかったみたいだ。」

「かわいそうですね。」

「まあね。彼女はとことん男運がなかったみたいで失恋したり捨てられたりばかりだよ。」

「その人がジエーランスと関係あるんですか？」

「いや、祖先。」

関係ありまくり……ていうか原点。

「あ、じゃあ結婚できたんですね！」

「うーん……まあ幸せになったのは事実。」

幸せの青い鳥って身近にいるんだねってことだ。むやみに探し回る

と自滅する。

「てことでまあ有名な伝説にもなってるくらい常識なのに、君は知らなかったんだね。」

「有名な伝説すら知らなかったよね……まあ暗殺姫伝はうちにあるから気になるなら貸してあげるよ。」

「ていうかもうあれ処分したいんだが。」

「子孫とは思えない発言だね。」

「かさばるし、邪魔だし、つか暗唱できるし。」

「うん。最後のはすごいと思う。」

ちなみに「私」は暗唱できない。だって、約五百ページ×三冊ですよ？

「ハイリツさんはもの知りなんですな……」

「いや、常識だから。あと僕の専門化学だよ？」

ハイリツは昔から化学の成績がものすごく良かったらしい……というか満点以外取ったことがないらしい。

「化学ですか。」

「うん。あとは、薬学とか、数学とか？」

「めちやくちや理系に偏ってますね……」

「別に国語や社会ができないわけじゃないよ？普通に毎回テストは二位だったから。」

一位はエリオスで、しかもオール満点だからまあ二位なのも仕方ない。

「それって一番の被害者は三位の人だよな……」

ハイリツやエリオスみたいなのはた目から見ても「与えられすぎ」の人にどんなに努力しても勝てない……かわいそうすぎる。

「まあねー。でも、文句あるなら僕らが受けてきた不幸やらなんやらを受けてから言っただけよ。僕ら与えられすぎなのに愛情だけ与えられてなかったからね……」

「与えられてなかったんじゃないかって、まともな愛情を知らなかっただけだろ？生まれた時から決まっていたことだし仕方がない。」

そう。生まれた時から決まっていたのだ……何もかも。

「そう考えたらこの女の子もものすごく憎くなってくるよね。」

この女の子の部分でアージェリアのほうを見る。

破壊欲旺盛だった一族（後書き）

まあ要するに破壊大好き一族です。もう破壊につきます。そういう一族です。また暇なときに活動報告にアップしますね。

とんでもない一族(前書き)

遅くなつてすみません……ちょっと長めです？

とんでもない一族

「そんなのはお前だけだと思う。」

「そうかな？だってこの子は幸せを知ってたんだろ？なのにそれを捨てたんだ。僕らが知らなかったものや手に入れることができなかったものを産まれた時から持ってたのに。腹が立って仕方がないね。」

「まあ気持ちは分かる。確かに腹が立つだろう。私やエリオスはまだ親と一緒にいた幸せな時間があつたけれど、ハイリツにはそれが皆無だったのだから。」

「めちやくちや憎くなってきた。殺しちゃだめ？」

「情報引き出さないと意味ないだろ？」

「じゃあ引き出した後は好きにしてい？」

「まあ別に……俺的にはこんなものどうでもいいし。」

「本当に君は他人に興味がないよね……ま、殺すのはやめとこう。」

そのかわり将来をめちやくちやにしよう。」

なんだろう、殺すよりもあくどい気がする。アージエリアに合掌。

「自分で責任取れよ？」

「分かっているさ。大丈夫。彼女に苦しい思いをさせるつもりはないよ。僕は君と違ってそんな言うほど暴力が好きじゃなわけじゃない。」

「そうだよな。お前ただただサディストなだけだもんな。で、拷問狂なだけだよな。」

「うん。」

そこ、満面の笑みで頷いていいところなのかな？

「ハイリツさん、そこは頷いていいところなのでしょうか……」

「え？いやだつて事実だし。あとはまあうちの家は基本的に全員めちやくちやサディストだったらしいから。あんまり抵抗ないよ？拷問狂に関してはむしろ誇るべき点だと思う。」

いや、絶対違うから。それ。

「そういう問題じゃないと思います。とつかいいんですか？拷問狂。」

「いいのいいの。だいたい姉さんとかヤバいからね。僕なんてまだ甘い。」

「あいつの話をするな。」

「ハイリツのお姉さん」エリオスの昔のご主人さま。すなわちジェーランス滅ぼした元凶。

「でもあの人ヤバイよね？僕よりもヤバイよね？」

「いやいやお前も十分にヤバいから。むしろあいつよりたちが悪いから。あれは暴力だけとお前の暴力じゃないしさ……後々に影響が残るし。」

「……アイリア……」

「ハイリツはとっても普通だと思うわ。」

「いや、絶対普通じゃねえ！と全員が突っ込もうとしたそのとき

「騒がしいですわ……」

「あ、起きた。」

「アージェリアがこのタイミングで起きちゃった！

「ちよつとごめんね。」

「へ？なんで注射器！自白薬ですか！そんなもの……あ……うたれちゃいました！どうしたらよいのです！」

「大丈夫大丈夫。」

いろいろあつて一時間後

「そろそろかなあ？」

「なにがですの！」

「リン、悪いんだけどさ、彼女を切つてくれない？」
「すげえ頼み！」

「え？ああ……うん。」

しかもまさかのOK！

「だからって、恨みこめてざっくりいっちゃだめだからね。」

「分かったよぉ……それは後でね。」

後ですか……

「それじゃあとありあえず……」

ナイフをアージェリアの肌に食い込ませる。そしてゆっくりと切っ
ていく……普通なら悲鳴を上げるだろう。

「……ん……あう……はぁ……」

そう。普通なら悲鳴を上げるはずなのだ。悲鳴を。

とんでもない一族（後書き）

ハイリツさんのお家はみなさんサディストです。狂ってます。多分
化け物として彼らを見たならば一番狂った一族です。

小話 大変だったホワイトデー（前書き）

皆様、地震や津波が起きて大変ですが大丈夫でしょうか。私は大阪在住なので平和に過ごせていますが……

どうやらこのような事態にもかかわらずこの騒ぎに便乗してよからぬことをしている人もいます。皆様、お気をつけくださいませ。皆様とその家族、友人のご無事をお祈りしております。

小話 大変だったホワイトデー

「あつうう……たくさん、ありますね。」

「そうだねえ。」

「ここらじゃ一番大きいしなあ。ここ。」

僕はここらで一番大きな百貨店にいた。まあ要するにホワイトデーにあげるものを買いにきたわけだ。で、後はシエルが買うだけでいいんだけど……なかなか決まらないようで。

「そして値段が高いですよー……」

「物価高いからねえ。」

「まあこんなもんだろ。」

一応バイトさせてあげたしお金はそれなりにあるはずだけどね。そりゃあコートとか靴とかは無理かもしれないけど。

「まあゆっくり選べば？」

「すみません。」

「別に暇だからいいけどな。いい暇つぶし。」

そうそう。

「大体大事なのは気持ちであつてもものじゃないし。」

「そうそう。そんなに悩む必要ないだろ。」

「分かってますけど……でもやっぱりできる限りのものをあげたいじゃないですか。」

ダメだ……この子、いい子すぎる。僕らと大違い。いやまあ僕らもちゃんと決めてるんだけどね？

「休憩する？」

「……はい。」

近くの喫茶店に入つてとりあえず一息。うーん……ここの紅茶は七
十点。

「あ、ここエリオスのおごりね。」

「ちょっと待て。」

「いやあ、だつてお金あるでしょ？」

「あるけどな？お前も十分持つてんだろ。」

「え？奢ってくれるって昨日言つてたじゃないか。」

「言つてねえ。」

知らない知らない。言つてたらなんとかしてくれるだろ。エリオスだし。

「え、でも、いいんですか？」

「いや、もともとお前の分はどつちかが持つつもりだったからいいんだけどな？学生に払わせるのもなんだし。」

ただな……と呟きながらこつちを見る友人。まったく……

「そんなに見つめられると照れるじゃないか。」

「もうお前黙れ……」

「じゃあおごりね。あ、すみません、モンブラン追加。」

うん、僕が払うわけじゃないしね。問題なし。

「お前、最低だな。」

「え？なんのこと？」

「……もういい。」

よし、勝った。

「さてと、もう一回探しに回りますか。」

シエールも休憩できたみたいだし。約一名、微妙に機嫌が悪いけど。

「お前機嫌いいな。」

「気のせいじゃない？」

こここのモンブラン、美味しかったな。紅茶は微妙だったけど。

「こここの紅茶、美味しかったですけど……なんでか微妙な感じでしたね。」

「美味しい紅茶ばかり飲んでるからだろ。どこその野郎のせいだ。」

「誰のこと？」

「気づけ馬鹿。」

「」

いやあ、だって美味しい紅茶飲みたいしさあ。おかげでうちの喫茶店は繁盛してますけど？

「紅茶……そういえば、ミリエナさんも紅茶党でしたっけ。」

「僕の知り合いでコーヒー党とかいない。」

「お前が無理やり紅茶党に変えたとも言っただよ。」

「気のせい気のせい。みんなが紅茶の美味しさに気づいたんだよ。」

「この前ポット割れたらしいんですよ。」

「ああ、じゃあそれ買えばいいんじゃない？」

「値段もまあまあそれなりだし。」

「そうですね。そうしましょう。」

「じゃ、上がるか。」

「そうだね。」

これで、一件落着いてわけじゃないだろうなあ……多分。

「うー……どれにしましょうか。」
「やっぱり。」

「色は明るいほうがいいよね。家の雰囲気的に。」

「ですよね。」

ミリエナの家明るいからね。

「……じゃあこれにします。」

「いいんじゃない？」

白くて、それなりに洒落たティーポット。値段もまあこんなもんだよね。うん、それでいいと思う。ていうかそろそろ帰りたいというのが本音。

「じゃあお会計してきます。」

「行ってらっしゃい。」

「いやあ、時間かかるね……」

「俺らが即決しすぎってのもあるだろうけどな。」

「初々しいよね。」

「なんかあいつ見てると罪悪感感じるわ。」

「そう？僕平気だけど。」

「……だろうな。」

僕のことを大体知ってる友人は、本日何回目かの溜息をつく。そう、僕は何も感じない。

だって、罪人であることに誇りを持つてる一族の人間だから今更罪が増えようと、何も感じない。

だから、シエールが子犬のようにパタパタ駆け寄ってきてもただ笑顔でいられる。

嘘で塗り固めすぎて

もう自分でも本当かどうか分からない笑顔を。

小話 大変だったホワイトデー（後書き）

知ってました？今日ホワイトデーですって。こんなことになってますけど。ホワイトデーなんです。西のほうは皆クッキーやらなんやらが受け渡しされてるんですよ？

てな訳で書いてみたホワイトデー小話。視点はハイリツさんです。最後のほうシリアスっぽいですけど、基本的にハイリツさんはこんな感じです。

悪趣味だった青年（前書き）

ハイリツさんの趣味がただただ綴られているだけ。

悪趣味だった青年

「……ん……あう……はぁ……」

そう。普通なら悲鳴を上げるはずなのだ。悲鳴を。

「やっぱり薬が効いてきたんだね。」

「お前はとことん悪趣味だな。」

「そうかなあ……」

「ええと……アージェリアさんの中で何が起こってるんですか？」

「まあ簡単に言うと、痛みが快感に変わってる。理性は残したままだから彼女は恥ずかしいことこの上ないだろうね。」

「何考えてるんですか……」

「いや、女の子が一番可愛い時って羞恥と快感に耐えてるときじゃない？」

悪趣味だ……なんでアイリアはこんなのと一緒にいるんだろうね。

「ハイリツさん……人間としてそれはいろいろとアウトです。」

ほら、シエールですら白い目だよ。

「そうかなあ？シエール、正直になって考えてみなよ。君が好きな女の子が恥ずかしいことに耐えてると想像して……」

「好きな人なんて……ていうかそんな人間失格なことできません！」

「試しにやってみるだけでいいから。どうしても嫌っていうならルーチェにすれば？相手も人間失格だから問題ないでしょ？」

いや、ちよつと待て。問題だらけだと思っぞ！

「え、いや……想像つかない……」

それはそれで傷つくなあ……

「じゃあ今ここでやってみる？ルーチェで。」

え？あの……ちよつと……？

「いや、そんなの……」

「見たくないの？」

「見てみたいですけど……ルーチェさん、完璧なので。でも……」

「だってさ。あとはよろしく。エリオス。」

「いや、ここにきて人任せかよ！しかもなにしろと？俺になにしろと？」

「だから、ルーチエが恥ずかしがるようなことをすればいいんだよ。快感もプラスしてくれるとすごく嬉しい。」

「いやいや……ちょっと待ってたら……みんなも見たくないってそんな私……ってあれ？なんかみんなが興味津津だよ？」

「……あのなあ……さすがにそれは……」

「さすがエリオス……ちゃんと分かってくれるんだ……」

「……まあいつか。」

「なんでそうなるの!？」

え？だって今断る雰囲気だったじゃん。絶対かばってってくれる雰囲気だったじゃん！

「大したことしないでいいんだよ。お前の場合。」

何も言い返せない!？

「君が相手なら……でしょ？で、何するの？さすがにあんまりひどいのは却下だよ。子供がいるし……」

「そんなヤバいことしなくても、首輪と手錠さえあれば普通に大丈夫だから。」

「用意してあるわ。」

ミリエナが私を裏切りました……いや、別に何を約束したわけでもないんだけど。

「ルーチエ……おとなしくしてないと……分かってるよな？あと、恨むなら俺じゃなくてハイリツとシエールを恨め。」

「なんで僕まで!」

だって元はと言えばシエールが悪いんだもん。そんなこんなで普通に手錠やらなんやらをつけさせられて……

「何か私悪いことしたかなあ……」

床に座り込んで言う。まあ抵抗しなかった私も私なだけけどさ……

「昔の面影ゼロですわ……」

「リン、アーゼリア黙らせて。」

「はい。」

というわけでアーゼリアはおとなしくなった。

「でも別にそんな耐えられないほどのものじゃ……」

「ルーチエ、お腹空かない？」

「あ……そういえばもう普通なら昼休みかあ……」

今日は食堂で……と思っていたから何も無い。

「ああ……それならさっき、私がサンドイッチを作ったのよ。」

そういえばさっきの（アーゼリアに薬が効くまでの）一時間、なんか出ていってたっけ……なるほど、お店でサンドイッチ作ってき
てくれたのか。

「じゃあ食べる……って待って。何この状況。食べようがないじゃん。」

「ご飯は食べなくちゃ……」

「そうよ。全員分作って来たんだから。」

それはすごい……けどなんでかな私。ものすごい嫌な予感がするな……

「うわ……アイリアさんってお料理上手なんだあ……」

「一応これでも喫茶店の店長だしね……」

魔法によってサンドイッチやジュースが持つてこられる。ああ、嫌な予感しかない！

悪趣味だった青年（後書き）

次回、ようやく色々分かる……かもしれない。

偽物だった少女(前書き)

お気に入り登録ありがとうございます。――
よろしくしてやってくださると幸いです。

ルーチェさんがようやく地を出したよ！

偽物だった少女

「いただきまーす。」

で、私はというと……

「はい、どうぞ。」

「あうう……エリオス……はずしてよぉ……手錠。」

「ダメだって。ほら。」

「私、何か悪いことしたかなあ……食べたくないなあ……」

というか、食べさせられたくないなあ……いやだなあ。

「俺が悪いんじゃないかってハイリツとシエールが悪いんだ。だからそんな恨みこもった目で俺を見るな。」

「だってさー……あーもういいよ。食べればいいんですよ。」

開き直る。もういいや。うん。どうせすぐ終わるんだし。

「最初から素直になっておけばいいのに。はい、どうぞ。」

「あうう……さすがにこれは恥ずかしいんだけどな……」

ゆっくりと差し出されたサンドイッチに近づいて……美味しく頂いた。一口サイズでよかったなあ……などと現実逃避に近いことを思いながら。

「美味しいけど……なんか納得いかない……」

「ね？可愛いでしょ？」

「ええ。悲しいことに今まで数時間見てきたどのルーチエさんよりも可愛かったです。」

シエールが変な色に染まってく。頼むからハイリツみたいにならないでほしい。後、この状況で可愛いとか言われてもぜんぜん嬉しくない。

「えーと……ちょっといいかな？」

「なに？」

「アージェリア、どうすればいい？」

あー……なんか途中から存在忘れてた。

「ああ……適当に、死ぬ直前まで痛めつけばいいから。」
「わかった。」

アージエリアの顔が真っ青だ。でもまあ仕方がない。

「で、もうこれいいでしょ。手錠と首輪、外してよ。」

「え、ああ……でも鍵、僕じゃなくてミリエナが持つてるからね。」

「はあ……」

確かにそれもそうだ。そして、ミリエナは鍵を渡してくれそうになり。

「どーしようかなー……」

ニヤニヤしているミリエナをみると腹が立ってきた。仕方ない。奥の手。

「早く私を解放なさい、愚民。それともこの愚かにもほどがある鎖とも言えないような、私に触れていることさえ許されないような物をちぎってあなたを壊してしまいませんか？」

そこにいる全員が凍りついた。

「早くしてくれないかしら。じゃないと我慢できずに貴女を消してしまうわ。」

「あ、あ……」

「ねえ、この程度の玩具、この私、リーディスフェイルにはいくらでも壊すことができるのよ？それをわざわざ貴女に解放させてあげると言っているの。ここは喜ぶべきよ？」

エリオス、ハイリツ、アイリアはすぐに事態に気がついたようで、溜息をついていた。

「ミリエナ、早くしたほうがいい。お姫様はお怒りだからね。」

ミリエナはがくがくしながら私のもとで跪き、鍵を開けた。

「この程度のことくらい早くしなさいね？じゃないといつか身を滅ぼしてしまうわ。敵がどれほど強大であれ、毅然とした態度をしなくちゃ。」

「分かってるわ……頭では。」

「そう。じゃあ行動できるように頑張りなさいな。まあ貴女でも頑

張ることはできるでしょう？努力がどれほど報われるかは知らないけど。」

彼女に微笑みかける。彼女は頷き、即座に私のそばから離れた。

「一体何なんですか……あなた誰です？少なくともルーチエさんじゃないですよ？」

「ええ。まったくもって違うわね。偽善者。私はさつき名乗ったでしょう？同じことは一度しか言わない主義なの。」

「エリオスさん、誰です？この人。」

「本人が名乗ってただろう？リーデイスフェイル、ノクフォルト。

孤独の姫、月姫、地獄の姫君とか言われてるな。まあなんというか

……元ルーチエだ。」

「乗っ取ったんですか。」

「いや。それは違う。こいつがルーチエだ。お前が今まで見ていたものこそが偽物だよ。」

「あら、そんなに言わなくても。彼女は精一杯頑張ってるじゃない。ていうか、そもそもアレを作ったのはエリオスでしょ？」

「まあな。なんていうか、久々に外に出てきたお前を見て思うんだが、やっぱりあいつ作つてよかったよ。うん。」

そりゃあそうだ。彼女がいなければ私はこの世で生きられないに違いない。

「どういうことですか……じゃあこの人が本物だつて言うんですか……この……人を馬鹿にしたこの女が、ルーチエさんだつていうんですか。」

どうも怒っているらしい。怒りたいのはこっちだというのに。こういう人がいるから私は外で生きられないのよ。

「シエール。怒りたい気持ちわかるし認めたくない気持ちもわかるよ。でも、彼女が本物なんだ。君が今まで一緒にいた人は、この彼女の性格を隠し通し、彼女……リデイスが外で生きるために作られたシステムなんだ。」

「意味がわかりません。」

偽物だった少女（後書き）

てな訳で次回過去編。

ちなみに、リデイスの性格はかなり悪いです。だいぶねじ曲がります。平気で毒を吐きます。でも実はいい子とかいうややこしい子です。

あと、リデイスは本名じゃなく、エリオスがつけた名前です。本名はルーチエ。

小話 長い長いエイプリルフル

「姉さん。」

「なに？」

「僕、姉さんのこと、大好きだよ。」

そう言うと、僕の大好きな姉さんはくすくす笑った。

「今日はエイプリルフルよ？ 本当のこと言ってどうするの。」

「え？ 本当のことをいう日じゃないの？」

「違うわよ。」

おかしいな。前読んだ本では、女の人が男の人に本心を伝えてたのに。だからてつきり本心を伝える日なのかと思ってた。

「辞書で調べてみなさいな。」

「うん。」

辞書の言葉を要約すると、エイプリルフルというのは罪のない嘘をついてもいい日、ということらしい。

「罪のない嘘って？」

「笑って許せる嘘ってことよ。」

「ふうん。」

そんな嘘、何の意味があるんだろう？ ついたって無駄じゃないか。

「ま、嘘で楽しむ日ってことよ。」

「よく分からないや。」

嘘なんて、みんないつもついてるのに、なんで日をわざわざ限定するの？

笑顔でみんなひどいこと思ってるのに、その嘘で楽しもうなんて一体何を考えているの？

小さな僕にはさっぱり分からなかったけれど、姉さんが笑顔だったから、そんなことどうでもよくなった。

「ハイリツ。」

「なあに？」

「大嫌いよ。」

「え？」

慌てる僕に、姉さんは笑いかけて。

「嘘よ。」

「ひどいや姉さん！こんな罪のない嘘なんかじゃないよ！」

「はいはい、ごめんなさいね。言ってみたかったただけなのよ。代わりに今日はアップルパイ作ってあげる。」

「ほんと？」

また、嘘だったらどうしよう。恐る恐る姉さんを見上げると、姉さんは笑って僕の髪をくしゃりと撫でた。

「本当よ。ほら、手伝って？」

「うん！」

そっか、エイプリルフルは姉さんが笑顔になる日なんだ。

「姉さん。」

「なに？」

「好きだよ。」

「そう、私もあなたのことが好きよ。」

どこまでも冷めきつた関係。のように見えて実は姉さんが慌ててるのを知っている。

「姉さん。」

「まだ何か言いたいこともあるの？」

後ろから、ギユウと抱きしめ、後ろから囁く。

「大嫌い。」

「……変な子。」

「そう？」

たったこれだけで安心する姉さんが可愛い。

「ふふふ。」

「何よ、不気味ね。」

「そんなことないと思うよ?」

だって、姉さんがあまりに分かりやす過ぎて。まあもともと僕らの関係はこんな感じだったけど。この頃僕がちよつとずるをして、姉さんが僕の「本当」を見つけれないようにしているだけで。もともとはこんな風にも、お互いのことを簡単に理解できる関係だったんだ。今は一方的だけど。でもそれは仕方のないこと。後少しでまたすぐに元通りになる。

「ね、姉さん。」

「今度は何。」

「大嫌いって言うて?」

「……意味分らないわ。」

「ねえ、言うてよ。」

今日は嘘つきの日でしょう?

「……大っ嫌い。」

「えへへ。そっか。」

「本当、気持ち悪いわね。なんか変なもの食べたんじゃないの?」

「違うって。」

姉さんの肩が少し震えてるのも、僕が帰ってからきつと崩れ落ちるんだろうってことも全部知ってる。僕を欲してることももちろん知ってる。

もっと、もっと、もっと、これ以上もないくらいに僕を欲したら。

「その時は、また、元通りにしようね。」

「は?」

今はまだ、嘘をついたままで。

「本当」を隠したままで。

だって

罪のない嘘ならついてもいいんでしょう？

罪のない嘘なら姉さんはまた笑顔になるんでしょう？

ね、姉さん

また、笑ってくれるよね。

長い長いエイプリルフールはまだ終わらないままで。
？

小話 長い長いエイプリルフール（後書き）

意味不明とか言わないであげてください。本編でちゃんといつかき
っと書きます。ちょっとネタバレにもならないネタバレをしますと
ハイリツはマリアにとある嘘をついていると。それがだいぶ厄介で
面倒な嘘だと。そういうことです。どんな嘘かは……いつか書きま
す。ていうかこいつは色んな奴に厄介で面倒で、ひどい嘘をついて
ます。本人罪ないって思ってますけどね。

昔はハイリツが小さすぎて、マリアの気持ちを理解しづらく、成長
してからはハイリツがマリアに「本当」を隠していて、マリアが理
解できていない。こいつら本当に意思疎通できてたのって多分五年
かそこらでしょうね。

そして彼らがどうしてそんな関係かといえはこれはちょっと先の本
編で明かされます。はあ。分かりにくい文章ですみませんでした>

（――）<

悪魔だった彼ら（前書き）

これですっきり色々としたものが解決ですね。ふう。作者も一安心。思う存分短編が書ける！

うわ、すみません。どうも別作品を間違えて投稿していたようで。r z。あ、これは大丈夫ですけど。お目汚し失礼しました！ 本当にすみません>（――）< なんでこんなことしてんだ私……本当に申し訳ございませんでした！

悪魔だった彼ら

「昔話だ。ルーチエは昔、貴族社会にいた。これは分かるな？」

「ええ。でもそれが何だっというんです？」

「貴族社会でこの性格は通用しない。当たり前だな……ていうかこの性格が通用する場なんてそうそうないな。」

「そりゃあそうでしょうね。」

「故にリデイス……昔のルーチエは猫を被った。誰にもばれないように。自分の大事な両親に笑っていらつために、その両親さえも騙した。」

「……」

「でもな、そんな事をしていると人間壊れていくんだよ。強烈な自己否定により、自己が破滅していくんだ。一番大事な自分の核が自分によって破壊されていくんだよ。分かるか？」

「ええ。」

「でも馬鹿な少女は騙しとおしたのさ。そして、それは少女の両親が死んだことで無駄になった。その少女にとっては両親こそが世界の全てで、それ以外はいつでもよかつたんだ。少女は両親に依存していた。その対象が消えて、全てが無駄になって……少女は壊れたのさ。今まで両親という存在でなんとか壊れずにすんでいたようなものだったからな。」

「それが、ルーチエさん？」

「そうだ。壊れた少女はどうでもよくなっていた。だから目の前に現れた男についていって、奴隷になった。地獄へ堕ちた。」

「……」

「男は少女に全てを与えた。そして少女は男に依存し始める。」

「……」

「そして男は少女にあるシステムを組み込んだ。少女の全てを無視して、勝手に動いてくれる猫。」

シエールの眼が見開かれた。そう。それこそが彼女。

「それが、今のルーチェ。そのシステムにより少女は社会へ……外の世界へ出ることができるようになりました。おしまい。」

昔話。大昔の話。

「ちなみに俺の前ではこいつはリデイスなことが多い。まあ当たり前だな。あとは、ハイリツは同じだから、親しい。双子は……微妙だな。ケルシャは無視に近い。アイリアはハイリツとセットだから親しい。リインは普通。ミリエナは……まあましなほうか。」

「あれでまじつてのが悲しいよね。リデイス、勝手に出てきちゃだめじゃないか。」

「システムが許可したの。」

「ふうん……あれには耐えきれなかったのか。」

「屈辱に耐えきれなくなったら、異常事態とみなして目覚めさせるようになつてるからな。まあ仕方ないだろ。こいつは俺以外に縛られることが極端に嫌なんだから。」

「まあそうだね。それにリデイスほど力が強ければ誰かに辱められることもないからね。」

「そういうことだ。他にもいろいろと目覚める条件はあるけれど。あと強いて言つなら……」

「それと……安定剤の問題か？このところ飲ませてなかったし。」

「今日の朝も目覚めそうになつたわよ、その偽善者のせいだ。」

「ああ……こいつの影響か。やつぱりお前も影響受けてたんだな。そりゃあもう。授業中に耐えきれなくなるかと思つたもの。」

「ハイリツさんは同じって言いましたよね？どういうことですか？「種族の問題だな。種族つつーかなんつつーか……」」

「黒血の問題だよ。悪魔の血……黒血。名前くらいは知ってるだろ？」

「あ……地獄に住む十三家の？」

「そうそう。あれって実在しててね……十三師は分かる？」

「その家の一番強い人？みたいなの……」

「その十三の家の一番深い人のことさ。僕、エリオス、リデイスはソレなんだよ。」

アルファデントは地獄の住人だ。《姫君》……地獄の住人の中の二番目。ジェーランスは《王》で一番目。ハイリツはエイジーン家の人間で《公爵》。三番目。

「ちなみに十三師は一応全員揃ってるんだよ。」

「なんか難しいお伽噺でしょう？力の代償がどうのこうの。」

「それは現実つてことさ。強き力の代償は……って奴だろ。僕は《憎悪》だ。」

生まれた時に決まっていた運命。強き力を勝手に押し付けられ、代償を払わされる。

「エリオスは《破壊》、リデイスは《処刑》。他にもいろいろあるんだよ。」

「それは代償ですか？力ですか？」

「両方かな？微妙だけどね……」

強き力はその身を滅ぼす……でも私たちの中に流れる血は、破滅さえも許さない。永遠に力を与え続け、代償を求める。

「あれ？でもルーチェさんの血、赤かったですよ？」

「ルーチェはこの世に適応しなきゃならないからな。赤い。リデイスは黒い。」

「よくわかりました。で、その代償とリデイス……さんの性格と関係は……」

「無い……とも言い切れない……か？」

確かにまあ無いとは言いい切れない。あるとも言い切れないけれど……

…性格というより本質の問題だと思っつけねどね。

悪魔だった彼ら（後書き）

てなわけで黒血。黒い血で、悪魔の血とも呼ばれたり。強き力を持つ代わりに思い代償を払わされるといふ。血自体に意識があり、器となった人からしてみれば鬱陶しいことこの上ない血です。この血を持つ者を人外と定義するならば、一番狂ってるのはエイジーン家です。定義しないならジェーランス家です。まあその辺はおいおい活動報告にでも。

歪みきっていた性格（前書き）

エリオスたちの苦勞話です。

歪みきっていた性格

「そうなるよ、僕の性格だって……」

「どの性格だ？」

「昔のも今のも。」

「昔のはまあ無くもないけど……あれはどう考えても姉の教育によるものだろう？で、今は才能？つか素質？アイリアに逢って昔の歪みきった性格の根元が壊れて元来のソレが出ちゃったみたいなの。どつちもまあ歪みきってるが。」

「歪みきった……ね。そうだね。僕らの歪さは黒血のせいかもね。」
「どこか歪んだ性格、私のはその歪みが大きかっただけ……だろうか。」
「でもエリオスさんは比較的ましな気が。」

「はあ？何言っちゃってんの。いや、確かにまあ素を見てないからあれだけだよ。エリオスは僕とリデイスを足して二で割ったようなイイ性格してんだよ？リデイスの口の悪さは確実にエリオスの影響だって。いやまあ素質もあるけども。」

「ハイリツ、お前……」

「え、あ、つい本音が。いやでも別に本当のことだし？ほら、全員目をそらしまくりだよ。みんなそう思ってたんだよ。」

確かにエリオスの素を知ってる人たちは目をそらしまくっていた。

「いや、そうじゃなく……お前、自分の性格の悪さに自覚があったんだな……」

「そつちか……いや、さすがにまあね……性格を改善しようとは思わないけどさ……我ながらかなりの性格だね。独占欲とか半端ないし、嫉妬深いし……まあこれはアイリアに逢ってから気づいたことだけ。」

「なんせ、見るな、触れるな、考えるな、ついでに話しかけるな。だもんな。」

高校時代のエリオスのクラスのルールだったそう。無論アイリア

に（を、について）、という言葉が前につく。ハイリツ曰く害虫駆除。ちなみに破った人は私刑。クラスメートは受け入れるも他クラスの人や教師はかなり迷惑を被ったとか。こんなのクラスメートに欲しくないわね。

「あの時は大変だったよね……男子がアイリアに話しかけるときに女子に頼んでたもんね。」

「よくまああんなルールが受け入れられたよな……僕の妹は大変だったんだぞ。」

アリスはたくさん伝言を頼まれていたらしい。

「え、ああごめんさい。」

「いいよ。大丈夫だったもんね。えへへ、お兄ちゃん褒めて。アリスを褒め称えて。」

「アリスは偉いね。」

「えへへ。」

嬉しそうにするアリス。褒め称えてというお願いを私は初めて聞いた。しかも冗談じゃないし。本気だし。

「あれが受け入れられたのは、中学の時からいろいろあったからだろう……それはもういろいろ……」

「僕は害虫駆除をしただけだろ？」

「クラスの全員が見守った恋愛は多分あれだけだ。お前らが付き合い始めた時にこれで被害が少なくて喜んだんだぞ……これで少しだけ他クラスの害虫が減ると……噂を流して、大急ぎでアイリアに嫉妬した奴らを説得、春休みいっぱいかけてそいつらの彼氏探し。いやはや大変だった。高校卒業の台詞は両親や教師への感謝でも後輩への頑張れでもなく、これでやっと苦労せずに済む、結婚式には呼んでくれ、それは俺たちの苦労の結晶だから。なんてクラスは後にも先にもうちだけだ。俺なんてご愁傷さま、まあ幼馴染だったことを悔やめ、何かあったら駆けつけてやるとまで言われたんだぞ。」
「どんなクラスなのよ。まあ何人かは知ってるし、苦労話も聞かされたけれど。」

「今なら彼らはどんな仕事もできるだろうね。僕に感謝すべきだ。」
「この前まだ結婚しないのか、一体何があつたんだ、早くしてくれ、苦勞が報われないと言われたぞ。あと、子供ができたら全員で育てる、じゃないと歪むと。」
「便利な奴らだね……あれだね、僕らの子供ができたら僕らより親バカになりそうだね。」
「お前な……」
「まあ感謝だけしとくよ。」
「そうか……」

歪みきっていた性格（後書き）

頑張ってますねー本当。今私が練っている構想のことを考えるとこの苦労は最終的にはほぼ全部水に流れ……いえ、何も。当時のハイリツさんの考え（ちょっとしたネタバレを含む上黒いです。注意。）は、

（あー、みんな頑張ってるなー。馬鹿なのかなー。まあクラスメイトはともかくエリオスがね。僕のこと信用しすぎだし、なーんにも気付いてないし。下手すりゃこいつ、そこらへんの女より可愛いんじゃないの？ 拷問したくなってくる。絶対いつか泣かせよ。可愛いに違いないね。あ、スイツチ入ってきたかも。仕方ないな。どっかにいい獲物は……あれでいいや。）

「愛してるよ。アイリア。だからあの害虫壊してくるね。」

無自覚でエリオス気に入ってるってどうなんでしょうか。ちなみに現在進行形で無自覚です。エリオスは友達の一人、いつでも切り捨て可能って思ってます。

穢れていた血筋（前書き）

ああ、ものすごく久しぶりな更新……不定期ですみません。私生活のことがたまたまその他諸々とか……はあ。

穢れていた血筋

溜息をついてるエリオスを見ながらふと思った。それはまだ結婚しないということだ。

「なあお前ら、いつ結婚する気だ？」

「貴方がそこまで空気読めないとさすがの私も思わなかったわ。」
ケルシャ、どこまでも空気を無視する男。とりあえず今日はおとなしいと思っていた矢先の出来事だった。

「そうだよそうだよ。アリスの苦勞が報われないよ、ていうか小説のネタにしようと思つてたり思つてなかったりだよ。」

あ、いやな予感。

「ピーとかピーとかピーとか、むぐぐ……ぶはあ、お兄ちゃん、何するの。」

アリスまで暴走し始めたじゃないか。

「ここ、学校だから。清く汚れを知らない子たちがたくさんいるから。」

「ねえねえ委員長、ピーって何？」

「え、いや、俺もわかんねえ。ライン？」

「えーと……説明したくないです。ていうかできないっていつか……」

「????？」

ほらみる、清く正しい子供たちがあんな卑猥な言葉を口にして、疑問符を浮かべてるじゃないか。

「そもそも小説のネタになる気ないし、特に君の書くやつは。」

アリス……その筋ではかなり有名な官能小説家。（副業のはず。）
思考がかなりダメな方向。

「あつう……保健の授業だもん……」

「あれはもはや保健じゃない。」

「だってすごくいいよ？二人とも綺麗だから……絶対いいよ？」

そして、この手のことになる」と口調は普通に。

「後、結婚する気はあんまり無いからね。子供はまあどっちでもいいけど。」

「なんで？」

「気づけよこの万年KY男が。」

「僕の汚れた血筋にアイリアを入れたくない。アイリアにまで罪を被せたくない。そんなのは僕一人で十分だ……姉さんはまああれだけど。自分から罪を被ってるけど。てかまああの人はほら、色々あるからね。別にいいんだけど。」

「あーなんか今俺聞いちゃいけない感じだったか？」
「当たり前だろうが。」

「まあ別にいいんだけどね。」

「でもさ、そう考えると子供はもっとアウトだろ？」
「まだ深入り！」

「まあね……でも不幸にはさせないしそういう世界と無縁にさせればいい話だから。」

「そうか……なるほど。お前は面倒見がいいからきつといい父親になると思うぞ。」

「あー……ありがとう？」

「なんだろう。心からケルシャを消し去りたいと思ってしまったわ。」

穢れていた血筋（後書き）

なんででしょうか。この時のハイリツの心境をものすごく書きたいです。書かないけどね。書くとほら、ネタバレになるしね。

最近気づいた。こいつらの中で一番性格悪いのはハイリツだ。一番不憫はアイリアで、なんやかんやでまともなのがリディスで、ちょっと不憫がエリオスだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1813n/>

月光のオルゴール

2011年10月9日21時49分発行